もう一つの智慧のわくまる

◉故事成語がズバリわかる！

【韓非子編③・荀子編①】

真理の御魂
最聖麻原彰晃尊師

もっと知恵のわく本 3.

◉故事成語がズバリわかる！【韓非子編③・荀子編①】

真理の御魂
最聖麻原彰晃尊師

はじめに

『もりもり智慧のわく書』第三弾は、韓非子と荀子を取り上げた。

この『智慧のわく書』は中国思想体系を完全に網羅し、そして凌駕する形で進めていきたいと考えている。というのは、もともとジャンブ州に存在する真理、つまり仏教体系をなすものは最高の教えである。そして、このクル州の教えである中国思想体系は、それに属する教えであると考えるべきである。

しかし、いくら属する教えであるといっても、その本質をジャンブ州の教えによって解き明かさない限り、「属す

る教えである」と証明したことにはならない。したがって、中国思想体系を凌駕する一環として、この『もりもり智慧のわく書』を発刊し続けるつもりでいるのである。

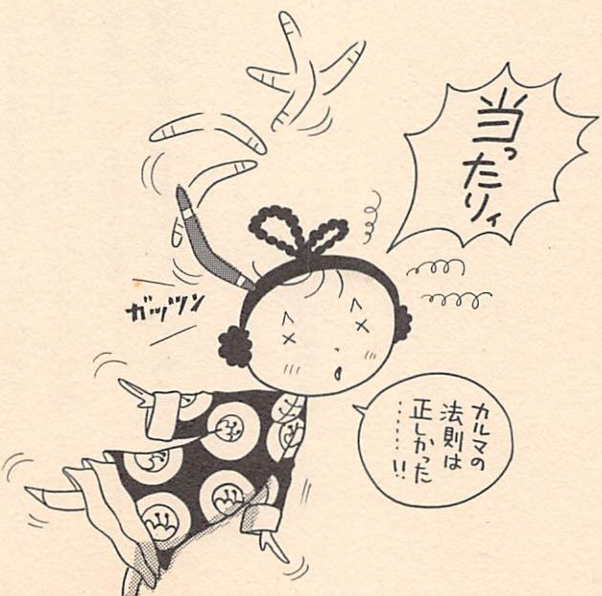
これにより、皆さんが真理の体系を理解し、そして最終の真理へと到達しますように。

麻原彰晃

もりもり智慧のわく書3.

【韓非子編③・荀子編①】

質的張りて弓矢至る



すべての災いはカルマ……!!

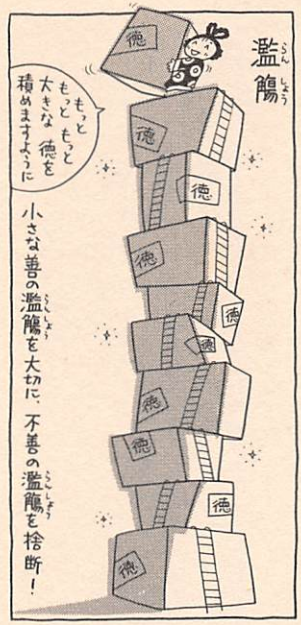
【韓非子編③】
◆涸沢の蛇……10
◆母好まるれば子抱かれ、
母悪まるれば子釈てらる……16
◆猿を柙中に置けば豚と同じ……20
◆民を視ること父母のごとし……24
◆小忠を行うは、則ち大忠の賊……28
◆坐するに席を重ねず……34
◆巌穴の士……42
◆楊布の狗……46
◆煬竈……50
◆口中の蝨……56
◆工人、数〻業を変ずれば
其の功を失う……60

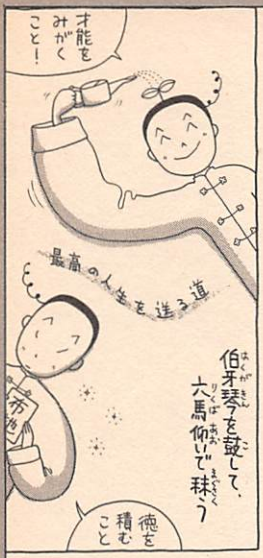
◆目は自ら見るに短なり……64
◆冠帯の国……68
◆小利を以て大罪を加えられず……72
◆虎に翼……76
◆虎の能く狗を服する所以は、爪牙なり……80
◆好みを去り悪みを去れば、群臣素を見わす……84
◆姦を知るも亦た大羅有り……88

【荀子編①】

◆口耳四寸……96
◆君なる者は舟なり、庶人なる者は水なり……100
◆伯牙琴を鼓して、六馬仰いで秣う……104
◆高山に登らざれば、天の高きを知らず……108
◆濫觴……112
◆風に順いて呼ぶ……116
◆青は藍より出でて、藍よりも青し……120

◆質的張りて弓矢至る……124
◆短を続ぎ長を断つ……128
◆是是非非……132
◆覆轍……136
◆蟬を耀かす……140





●編集スタッフ
聖者ヤソーダラー最上善逝
聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂
聖者マハーナーマ化身成就師
聖者ヴァンギーサ上流師
聖者タントラバッダー到達光正師
瓦吹英宣
●イラストレーション
片桐りえ
●カバー・デザイン
スワミ・タントラスバー
●題字
スワミ・ヴァラカツ

韓非子編 ③

❖涸沢の蛇

［韓非子、説林上］　鴟夷子皮事田成子。田成子去斉、走而之燕。鴟夷子皮負伝而従、至望邑。子皮曰、「子独不聞涸沢之蛇乎。涸沢蛇将徙。有小蛇、謂大蛇曰、『子行而我随之、人以為、蛇之行者耳。必有殺子。不如相銜負我以行。人必以我為神君也。』乃相銜負以越公道。人皆避之曰、『神君也。』今子美而我悪。以子為我上客、千乗之君也。以子為我使者、万乗之卿也。子不如為我舎人。」田成子因負伝而随之、至逆旅。逆旅之君、待之甚敬、因献酒肉。

【書き下し文】

鴟夷子皮、田成子に事う。田成子斉を去り、走りて燕に之く。鴟夷子皮、伝を負いて

従い、望邑に至る。子皮曰く、「子独り涸沢の蛇を聞かずや。涸沢の蛇、将に徙らんとす。小蛇有り、大蛇に謂いて曰く、『子行きて我之に随わば、人以為えらく、蛇の行く者のみと。必ず子を殺すこと有らん。相銜みて我を負いて以て行くに如かず。人必ず我を以て神君と為さん』と。乃ち相銜負して以て公道を越ゆ。人皆之を避けて曰く、『神君なり』と。今、子は美にして我は悪し。子を以て我が上客と為さば、千乗の君なり。子を以て我が使者と為さば、万乗の卿なり。子、我が舎人と為るに如かず」と。田成子、因りて伝を負いて之に随い、逆旅に至る。逆旅の君、之を待つこと甚だ敬い、因りて酒肉を献ぜり。

【訳】

鴟夷子皮は、田成子に仕えたが、田成子は斉を去ることになり、出奔して燕に向かった。鴟夷子皮は関所の通行手形を背にしてお供をし、望という町に至った。

そして、子皮がいうには、

「あなたは水がかれた沢の蛇の話をお聞きになっていませんか。水がかれた沢の蛇が、

住まいを移そうとしていたとき、小さな蛇が大きな蛇に告げていうには、『あなたが先に行って、わたしが後からついていくなら、人々はただ蛇が行くと思うだけで、きっとあなたを殺すでしょう。そこで、お互いに尾を口にくわえて、わたしをあなたが背負っていくのが最も良いのです。そうすれば、人々はきっとわたしを神さまだと思うでしょう』と。

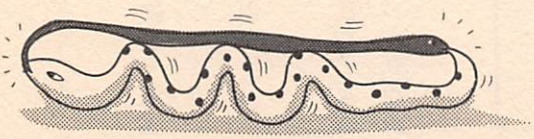
そこで、お互いに尾を口にくわえ、小さな蛇を大きな蛇が背負って、大通りを渡りました。すると、人々は皆、この蛇をよけて言ったのです。『神さまだ』と。

今あなたはご立派で、わたしは醜い男です。そこで、あなたをわたしの上に立つ者とするならば、あなたはせいぜいが兵車千台を出せる国の君主に見られるだけですが、あなたをわたしの召使いとするならば、あなたは兵車一万を出せる大国の大臣に見られるでしょう。つまり、あなたはわたしの家来となるのが最も良いのです」と。

そこで、田成子は関所の通行手形を背にして後に従い、旅館に至った。すると、旅館の主人は大層謹んで厚遇し、酒や肉をご馳走したのである。

【注】

・鴟夷子皮――春秋時代、越王勾践（こうせん）に仕えた范蠡（はんれい）の別名。
・田成子――春秋時代、斉の大夫（たいふ）。陳恆（ちんこう）の謚（おくりな）。
・望――今の河北省にある地名。



今日の故事成語は「涸沢の蛇」です。

これは乾いた沢にいる蛇という意味です。この意味はお互いがお互いを利用し合い、それによって成功するというところから来ています。

もともと、わたしたちが自分の力だけではなく他人の力をうまく利用して物事を達成することができるならば、それは大変素晴らしいことです。しかし、そのためには魂にとって最も必要な〝智慧〟というものが必要です。そして、その智慧を磨く道、それこそが真理の実践なのです。

したがって、あなたがこの「涸沢の蛇」のような力を発揮するためには、真理の実践を行ない、そして、智慧の達成をすること、これが必須条件となります。しっかり頑張りましょう。

CHIE
ナーボード
達成するためには智慧が必要……
やった!!
CHIE

❖母好まるれば子抱かれ、母悪まるれば子釈てらる

［韓非子、備内］　語曰、「其母好者、其子抱。」然則其為之反也、其母悪者、其子釈。

【書き下し文】

語に曰く、「其の母好まるれば、其の子抱かる」と。然らば則ち其れ之が反を為すや、其の母悪まるれば、其の子釈てらる。

【訳】

世俗の言葉にいうには、

「その母が好まれるなら、その子も抱かれる」と。

それならば、その反対に、その母が憎まれるなら、その子も捨てられることになる。

今日の故事成語は、「母好まるれば子抱かれ、母悪まるれば子釈てらる」です。もともと夫婦の考え方というものは、キリスト教の成立、そして発展とともに確立されてきました。つまり、キリスト教の成立以前はもっと自由な夫婦関係であったと見ることができます。

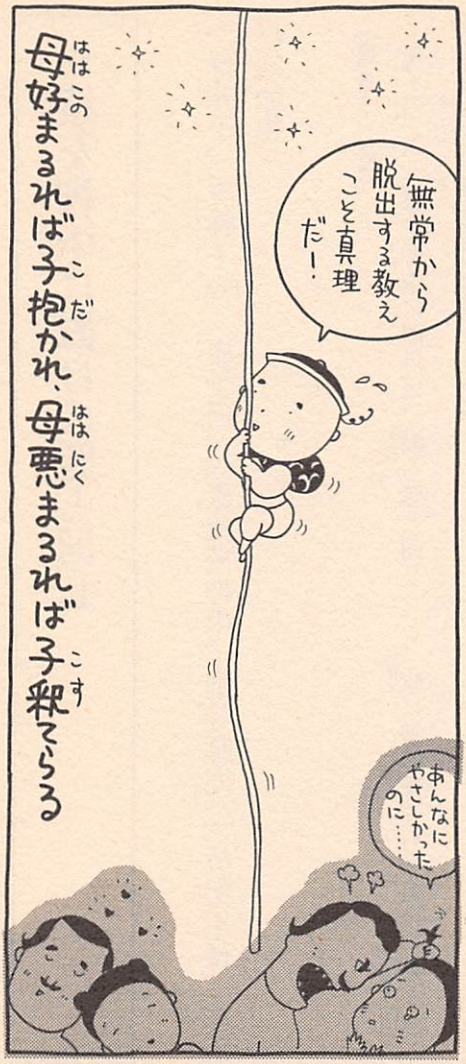
したがって、この「母好まるれば子抱かれ、母悪まるれば子釈てらる」という内容は、まさに男性の心理を表わしているように思われます。つまり、夫が妻を愛すればその子をよく抱くし、また妻を愛さなければその子は捨てられるという意味です。

ところで、現代は多くの堕胎があります。そして、この堕胎は、男性が女性を愛していないがゆえの堕胎ではなく、社会的条件や、あるいは女性の側のエゴといったようなものが背景となっています。したがって、この故事成語は今の時代に当てはまるとはいえないように思われます。

ところで、この成語はいずれにしろわたしたちに一つの示唆を与えてくれます。それはすべてが無常であるということです。もし、夫が妻をずっと愛し続けてくれるなら、確かにその子供も好まれるでしょうが、また別に愛する女性が現われたら、その子供は

疎んじられるということなのです。

そして、その無常から脱出する教えこそ真理であり、その真理を完全に理解し到達した者、これこそが覚者なのです。そしてこの『もりもり智慧のわく書』の読者の皆さんが真理の実践を行なえば、必ずや多くの覚者が誕生するはずです。頑張りましょう。



❖猿を柙中に置けば豚と同じ

「韓非子、説林下」　恵子曰、「置猿於柙中、則与豚同。」故勢不便、非所以逞能也。

【書き下し文】

恵子曰く、「猿を柙中に置けば、則ち豚と同じ」と。故に勢い便ならざるは、能を逞しくする所以に非ざるなり。

【訳】

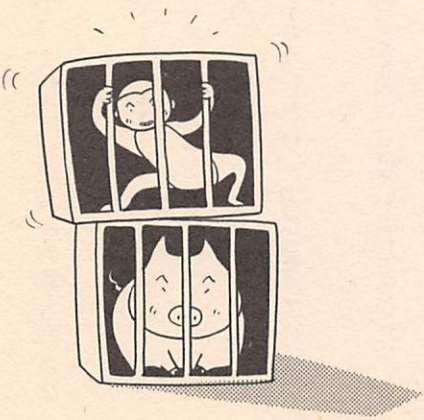
恵子がいうには、

「猿を檻の中に入れておけば、豚と同じである」と。

つまり、情勢が有利でなければ、能力を思う存分に発揮できないのである。

【注】

・恵子――戦国時代、宋（そう）の政治家・思想家。名家（めいか）の一人。



今日の故事成語は「猿を柙中に置けば豚と同じ」です。これは、わたしの最も好きな故事成語のタイプということができます。

「柙中」とは小さな動物を入れておく檻という意味です。つまり、いかに敏捷な猿であったとしても、小さな檻に入れられれば、そのすばしっこさ、あるいはその猿の持つ機能というものを発揮することができないと。それと同じように、いくら有能であったとしても、その有能な人にそれを発揮する場所が与えられなければ、力は発揮できないんだというたとえです。

ところでわたしは、一つのエピソードを、このことわざを聞いて思い出しました。それは劉邦と韓信との対話です。

韓信は、自分自身は数万、数十万、数百万と数が多くなればなるほど将軍としての力量を発揮することができると劉邦に豪語しています。しかし劉邦は、個人としては数十万の軍勢しか扱うことができないと。しかし、将軍の才能を引き出し、そしてそれによって将軍の力量の総和を作り出し、戦いに勝つことができるという、劉邦ならではの独特の才能が存在するんだという話が中国史には説かれています。

そして、この才能を見いだす力こそボーディサットヴァの目であり、ボーディサットヴァとは真理に完達し、他の利益を最も考え、そして引き出すことのできる魂ということができるでしょう。

したがって、皆さんも真理の実践を行ない、そして早く偉大なボーディサットヴァとなり、皆さんの周りにいる猿をしっかりと見いだし、そしてその上に君臨し、豊かな人生を生きていただきたいものです。

❖民を視ること父母のごとし

［韓非子、五蠹］　今儒・墨皆称、「先王兼愛天下、則視民如父母。」

【書き下し文】

今、儒・墨皆称す、「先王、天下を兼愛するは、則ち民を視ること父母の如くなりき」と。

【訳】

今、儒者や墨者は皆こう誉め立てる。

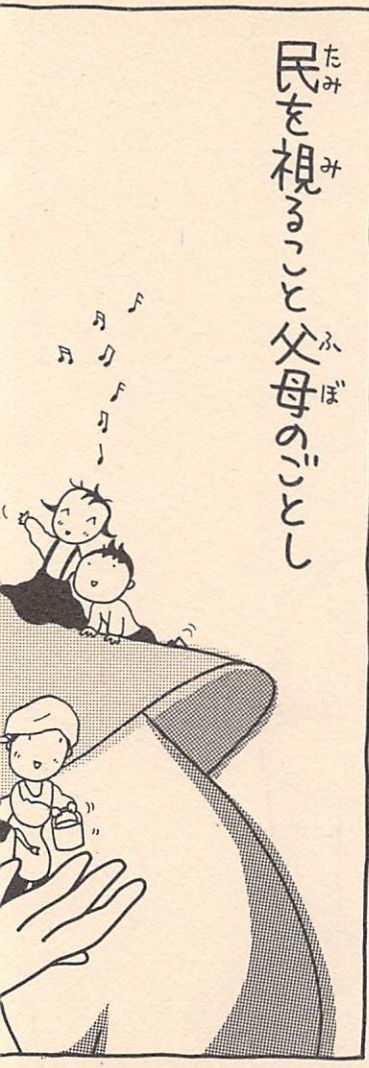
「昔の聖王は天下の人々を平等に愛し、人民を見ることは父母が子供を慈しむようであった」と。

今日の故事成語は「民を視ること父母のごとし」です。

これは、立派な君主がその支配下にある人々を見るとき、その一人一人を父親や母親が子供を見るように見る。つまり、一人一人慈しみの心を持って見るという意味です。

もし、このような関係で君主と、そして民の関係が成立するならば、その国は大変素晴らしい国であるということができるでしょう。そして、これは理想的な統治形態である転輪聖王と、その民との関係に値します。そして、今の時代が終わり新しい時代が登場するとき、この素晴らしい統治形態が成立すると予言されています。

わたしも「そういう時代が早く来ないかな」といつも考えています。



ひとりひとりに
慈しみの心を持つ
理想的な統治形態……！

❖小忠(しょうちゅう)を行(おこな)うは、則(すなわ)ち大忠(だいちゅう)の賊(ぞく)

［韓非子、十過］　奚謂小忠。昔者楚共王与晋厲公戦於鄢陵。楚師敗、而共王傷其目。酣戦之時、司馬子反渇而求飲。豎穀陽操觴酒而進之。子反曰、「嘻、退、酒也。」豎穀陽曰、「非酒也。」子反受而飲之。子反之為人也嗜酒、而甘之弗能絶於口而酔。戦既罷。共王欲復戦、令人召司馬子反。司馬子反辞以心疾。

共王駕而自往、入其幄中、聞酒臭而還。曰、「今日之戦、不穀親傷。所恃者司馬也、而司馬又酔如此。是亡楚国之社稷、而不恤吾衆也。不穀無復戦矣。」於是還師而去、斬司馬子反、以為大戮。故豎穀陽之進酒、不以讎子反也、其心忠愛之、而適足以殺之。故曰、「行小忠、則大忠之賊也。」

【書き下し文】

奚をか小忠と謂う。昔者楚の共王、晋の厲公と鄢陵に戦う。楚師敗れて、共王其の目に傷く。酣戦の時、司馬子反渇きて飲を求む。豎穀陽、觴酒を操って之を進む。子反曰く、「嘻、退けよ、酒なり」と。豎穀陽曰く、「酒に非ざるなり」と。子反受けて之を飲む。子反の人と為りや酒を嗜みて、之を甘しとするときは口に絶つ能わずして酔う。戦既に罷む。共王復び戦わんと欲し、人をして司馬子反を召さしむ。司馬子反辞するに心疾を以てす。

共王駕して自ら往き、其の幄中に入り、酒臭を聞いて還る。曰く、「今日の戦、不穀親ら傷く。恃む所は司馬なり、而れども司馬又酔うて此の如し。是れ楚国の社稷を亡れて、吾が衆を恤えざるなり。不穀復戦う無し」と。是に於て師を還らして去り、司馬子反を斬り、以て大戮と為す。故に豎穀陽の酒を進むるは、以て子反に讎なすにあらざるなり、其の心之を忠愛し、而も適〻以て之を殺すに足るなり。故に曰く、「小忠を行うは、則ち大忠の賊なり」と。

【訳】

何を「小さな忠義立て」というのであろうか。

昔、楚の共王が、晋の厲公と鄢陵で戦った。そして、楚軍は敗れて、共王は目に負傷した。

この戦いがたけなわのとき、将軍の子反は喉が渇いて水を求めた。そこで、家来の穀陽は酒を器に盛って勧めた。子反がいうには、

「ああ、やめろ、酒だ」と。

すると、家来の穀陽がいうには、

「酒ではございません」と。

そこで、子反は受けてこれを飲んだ。もともと子反は酒好きで、これはうまいと思ったが最後、口から離すことができずに酔っぱらってしまうのである。

やがて戦いが終わった。共王はもう一度戦いを挑もうと、人に命じて将軍の子反を呼び寄せた。ところが、将軍の子反は胸の具合が悪いといって断った。

そこで、共王は車に乗って自分から出かけ、子反の陣中に入り、酒の臭いをかぎつけ

て帰った。そしていうには、

「今日の戦いでは、わたし自らも負傷した。頼みに思うのは将軍だというのに、その将軍までがこのように酔いつぶれている。これは、楚の国家を忘れ、われわれ君民のことを気にもかけていないのだ。わたしはもう戦えないぞ」と。

そこで、軍の向きを変えて引き揚げ、将軍の子反を斬って重罰を示した。

つまり、家来の穀陽が酒を勧めたのは、何も子反を害しようとしたのではない。心では主人を愛し誠意を尽くしたのだが、たまたま彼を殺すことになったのである。したがって、「小さな忠義立てを行なうのは、大きな忠義立てを損なうことになる」というのである。

【注】

・共王――春秋時代、楚の王。荘王の子。
・厲公――春秋時代、晋の主。景公の子。
・子反――春秋時代、楚の将軍。公子側(こうしそく)の字(あざな)。
・鄢陵――春秋時代の鄭(てい)。今の河南省許昌県の北東。

今日の故事成語は「小忠を行うは、則ち大忠の賊」です。

「小忠」とは小さな忠義立てということで、この成語は小さな忠義立てによって大きな忠義を損なうという意味です。

これは、会社などでもよくある話です。例えば、会社の経理部長が社長の言いなりに出金をすると。そしていつも「経済的なことはご安心ください」という言葉しか吐かないと。実際それが半年、一年経ってみると、会社は大赤字になっていると。このような例は、この不況下においてよくある話であり、そして、それによって倒産する会社が続出しているという話を聞きます。

ところで、この小忠、小さな忠義立てにはどのような心の働きがあるのでしょうか。それは「上司からよく思われたい」、「会社のことよりも上司にゴマをすって出世したいんだ」という心のけがれがあるようにわたしには思われます。また、その心のけがれのある者をそばに置いておく社長、あるいは上役の器の狭さを感ぜずにはいられません。

これらの問題点を解決するためには、心の寂静――、つまりすべての現象に対して頓着せず正しく見つめる目を養うことが必要です。そして、そのためには真理の実践、こ

れが最も早道だということができます。

❖坐するに席を重ねず

「韓非子、外儲説左下」　孟献伯相魯。堂下生藿藜、門外長荊棘。食不二味、坐不重席、内無衣帛之妾、居不粟馬、出不従車。叔向聞之、以告苗賁皇。賁皇非之曰、「是出主之爵祿以附下也。」

一曰。孟献伯拝上卿。叔向往賀。門有御馬、不食禾。向曰、「子無二馬二輿何也。」献伯曰、「吾観国人、尚有飢色。是以不秣馬。斑白者多徒行。故不二輿。」向曰、「吾始賀子之拝卿。今賀子之倹也。」向出語苗賁皇曰、「助吾賀献伯之倹也。」苗子曰、「何賀焉。夫爵祿旂章、所以異功伐、別賢不肖也。故晋国之法、上大夫二輿二乗、中大夫二輿一乗、下大夫専乗、此明等級也。且夫卿必有軍事。是故修車馬、比卒乗、以備戎事。有難則以備不虞、平夷則以給朝事。今乱其国之政、乏不虞之備、以成節倹、以潔私名。

献伯之倹也可与。又何賀。」

【書き下し文】

孟献伯、魯に相たり。堂下に藿藜生じ、門外に荊棘長ず。食うに味を二にせず、坐するに席を重ねず、内に帛を衣るの妾無く、居るに馬に粟せず、出づるに車を従えず。叔向之を聞きて、以て苗賁皇に告ぐ。賁皇之を非として曰く、「是れ主の爵禄を出でて以て下を附くるなり」と。

一に曰く。孟献伯上卿に拝す。叔向往きて賀す。門に御馬有り、禾を食わず。向曰く、「子に二馬二輿無きは何ぞや」と。献伯曰く、「吾国人を観るに、尚お飢色有り。是を以て馬に秣わず。斑白の者多く徒行す。故に二輿せず」と。向曰く、「吾始め子の卿に拝せらるるを賀す。今は子の倹を賀するなり」と。向出でて、苗賁皇に語りて曰く、「吾を助けて献伯の倹を賀せよ」と。苗子曰く、「何ぞ賀せん。夫れ爵禄旂章は、功伐を異にし、賢不肖を別つ所以なり。故に晋国の法に、上大夫は二輿二乗、中大夫は二輿一乗、下大夫は専乗なるは、此れ等級を明かにするなり。且つ夫の卿は必ず軍事有り。是の故に車

馬を修め、卒乗を比し、以て戎事に備う。難有れば則ち以て不虞に備え、平夷なれば則ち以て朝事に給す。今其の国の政を乱し、不虞の備を乏しくして、以て節倹を成し、以て私名を潔くす。献伯の倹や可ならんか。又何ぞ賀せん」と。

【訳】

孟献伯が魯の宰相であったとき、（人の出入りが少ないため、）高殿の下には豆の葉やアカザが生え、門の外にはイバラが茂っていた。食事をするときは料理を二品にすることがなく、座るときは敷物を重ねることがなく、家には絹を着ている妾がなく、家にいるときは馬に粟を与えず、外出するときは車を従えなかった。

叔向はこのことを聞いて、苗賁皇に告げた。すると、賁皇が非難していうには、

「これは、君主から賜わった爵位と俸禄の決まりから外れ、下々に迎合しているのだ」と。

一説にはこういう。

孟献伯が上卿（最高大臣）に任ぜられたので、叔向がお祝いに行った。門のところに

馬車の馬がつながれていたが、それが食っているのは麦や粟ではなかった。そこで、叔向がいうには、

「あなたが二頭の馬と二台の馬車を持っていらっしゃらないのは、どうしてですか」と。

献伯がいうには、

「わたしがこの国の人民を見ると、まだ飢えた顔色をしています。だから、馬をまぐさで養っていないのです。また、白髪頭の老人がたくさん歩いています。したがって、馬車を二台にしないのです」と。

叔向がいうには、

「わたしは、最初あなたが上卿になられたのをお祝いするつもりでしたが、今はあなたの倹約のお心をお祝いいたしましょう」と。

そして、叔向はそこを去り、苗賁皇に話していうには、

「きみも賛成して、献伯の倹約の心を祝いなさい」と。

そこで、苗子がいうには、

「どうして祝うことがあろうか。そもそも、爵位や俸禄や旗印は、功労の大小の差異を

示し、賢愚の違いを分けるものである。つまり、晋国の法によると、上大夫は馬車二台と馬二組、中大夫は馬車二台と馬一組、下大夫は馬車一台と馬一組となっているが、これは身分の差を明らかにしているのである。

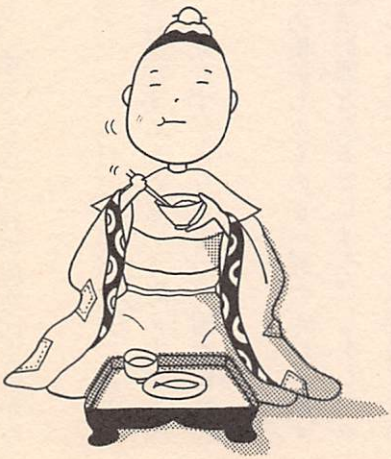
そのうえ、かの卿には必ず軍務がある。そのためには、車と馬を整え、兵士と戦車をそろえて、戦争に備える。国難があるときには万一のために備え、平穏であるときには国政に役立てるのである。

ところが今、献伯は自分の国の政治を乱し、万一の準備を欠き、節約を行なうことによって自らの評判を良くしている。献伯の倹約は良いことであろうか。ましてや、どうして祝うことができようか」と。

【注】

・孟献伯――春秋時代、魯の大夫。
・叔向――春秋時代、晋の賢人。羊舌肸の字。
・苗賁皇――春秋時代、楚の人。晋に帰化した賢人。

坐するに席を重ねず



今日の故事成語は「坐するに席を重ねず」。つまり、座るときに二枚の座布団を敷かないという意味です。

これは、倹約を意味した故事成語ですが、この倹約については二つの考え方があります。一つは倹約こそ美徳であり、それによって国家は繁栄するんだという考え方。もう一つは、その倹約によって、逆に身分の上下がはっきりせず、それによって国家が乱れるという考え方です。

これはどちらにしろ、個々が倹約し、そして、その倹約したものを一般の人に還元することを徹底的に行なうならば、それは理想的な政治形態となるでしょう。しかし、その倹約が周りから称賛されるためのものであるとするならば、それは全く無価値なものとなります。

したがって、倹約そのものに意味があるのではなく、その倹約を行なうときの心の働きに意味があるといえるでしょう。

坐するに席を重ねず
このお金が国民の幸せに還元されますように
きょうも倹約できたワ
チャリン チャリン
倹約を行なうときの心の働きは？
見てくださいヨ！なかなか倹約してるでしょう！
ホラ ホラ スゴイ？

❖巌穴の士

「韓非子、外儲説左上」　李疵対曰、「其君好見巌穴之士。傾蓋与車、以見窮閭隘巷之士、以十数、伉礼下布衣之士、以百数矣。」

【書き下し文】

李疵対えて曰く、「其の君好みて巌穴の士を見る。蓋を傾け車を与にし、以て窮閭隘巷の士を見ること、十を以て数え、伉礼して布衣の士に下ること、百を以て数う」と。

【訳】

李疵がお答えしていうには、

「中山の君主は、岩穴に住む賢士に会うのが好きです。道で賢士に出会うと、車を止め

て車蓋を傾けたり、車に乗せたりして語り合い、辺鄙な村里や狭い路地に隠れ住む賢士に会うことが何十回もありますし、対等の礼をとって官位もない処士にへりくだることが何百回もあります」と。

【注】

・李疵――戦国時代、趙の人。
・中山――戦国時代の中山国。今の河北省定県。

今日の故事成語は「巌穴の士」です。

この「巌穴」とは岩穴という意味で、「巌穴の士」とは岩穴で瞑想する聖者、賢人のことを表わします。そして、この巌穴の士とまみえることは君主の徳を増大させ、そして、しまいには多くの天下を統一するという考え方が中国に存在していました。

ところで、これは経典の中の『転輪獅子吼経』の中にも同じ一節があります。つまり、転輪聖王は、出家し、そして隠遁している者とできるだけ多くまみえなさいというのが先代からの言い伝えとなるのです。

では、なぜこの「巌穴の士」とまみえれば徳が増大し、そして統治がうまくいくのでしょうか。それは、法則にかなった教えを聞くことができ、それによりその国の民から慕われ、そして万事がうまくいくからなのです。

そして、このような形態の統治がもしなされるならば、いかなる国においても幸福が約束されるでしょう。

国を幸福に治めるには……
どうか
わたくしに
法を説いて
ください
民のためにも…
巌穴の士

❖楊布の狗

［韓非子、説林下］　楊朱之弟楊布、衣素衣而出。天雨、解素衣、衣緇衣而反。其狗不知而吠之。楊布怒将撃之。楊朱曰、「子毋撃也、子亦猶是。曩者使女狗白而往、黒而来、子豈能毋怪哉。」

【書き下し文】

楊朱の弟楊布、素衣を衣て出づ。天雨ふり、素衣を解き、緇衣を衣て反る。其の狗知らずして之に吠ゆ。楊布怒り将に之を撃たんとす。楊朱曰く、「子撃つこと毋かれ、子も亦猶お是のごとし。曩に女が狗をして白くして往き、黒くして来たらしめば、子豈に能く怪しむ毋からんや」と。

【訳】

楊朱の弟の楊布が、白い着物を着て外出した。雨が降ってきたので、白い着物を脱ぎ、黒い着物を着て帰ってきた。すると、その飼い犬が気づかずにほえた。楊布は怒って叩こうとした。

そこで、楊朱がいうには、

「お前、叩いてはいけないよ。お前だって同じだろう。もしもお前の犬が真っ白で出ていき、黒くなって帰ってきたら、お前も怪しまずにはいられないだろ」と。

【注】

・楊朱――戦国時代の思想家。墨子の兼愛説と相反する利己主義を唱えた。

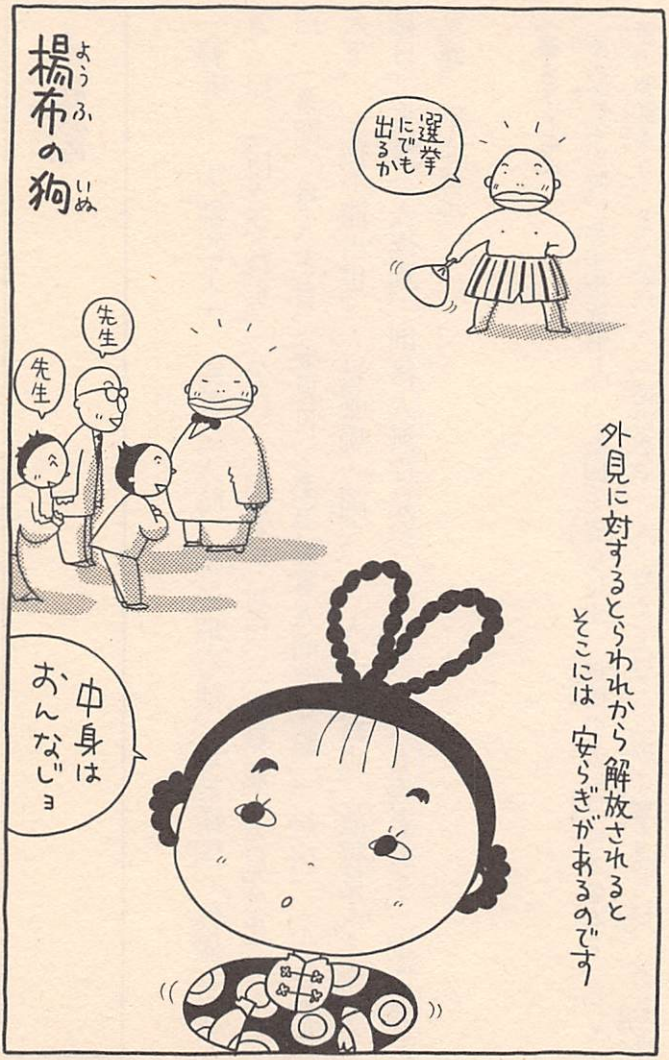
今日の故事成語は「楊布の狗」です。

この「楊布の狗」とは、中身が変わっていないのに外見が変わっていれば、人は中身が変わったかのように錯覚を起こすという意味です。

例えば、ある土建屋の社長が金を使い、そして代議士になったとしましょう。当然着る服装も変わり、乗る車も変わったと。しかし、中身は変わっていないと。それにもかかわらず、みんなは「代議士先生」、「代議士先生さまさま」といった態度をとると。

ところで、これらの現象は、わたしたちが外見にとらわれている、執着しているから起きる現象です。そして、これらの外的様態から完全に離脱すること、これこそが解脱なのです。

皆さんが真理の実践を行なうならば、皆さんは、外的な条件の変化によって生じる心の乱れが完全に止まるはずです。そして、そのときそこそ安らぎが存在するのです。


楊布の狗
選挙にでも出るか
先生
先生
中身はおんなじょ
外見に対するとらわれから解放されると
そこには 安らぎがあるのです

❖ 煬竈

［韓非子、内儲説上］　衛霊公之時、弥子瑕有寵、専於衛国。侏儒有見公者。曰、「臣之夢践矣。」公曰、「何夢。」対曰、「夢見竈、為見公也。」公怒曰、「吾聞、見人主者、夢見日。奚為見寡人而夢見竈。」対曰、「夫日兼燭天下、一物不能当也。人君兼燭一国人、一人不能擁也。故将見人主者、夢見日。夫竈一人煬焉、則後人無従見矣。今或者一人有煬君者乎、則臣雖夢見竈、不亦可乎。」

【書き下し文】

衛の霊公の時、弥子瑕寵有りて、衛国を専らにす。侏儒の公に見ゆる者有り。曰く、「臣の夢践あり」と。公曰く、「何の夢ぞ」と。対えて曰く、「夢に竈を見るは、公に見ゆ

るが為なり」と。公怒りて曰く、「吾聞く、人主に見ゆる者は、夢に日を見ると。奚ぞ寡人を見るが為にして夢に竈を見る」と。対えて曰く、「夫れ日は天下を兼燭す、一物のみ当たる能わざるなり。人君は一国の人を兼燭す、一人のみ擁する能わざるなり。故に将に人主に見えんとする者は、夢に日を見る。夫れ竈は一人焉に煬れば、則ち後人従って見る無し。今或いは一人君に煬る者有るか、則ち臣夢に竈を見ると雖も、亦可ならずや」と。

【訳】

衛の霊公のとき、弥子瑕は寵愛され、衛の国を思いのままにしていた。あるとき、公にお会いしたこびとがいて、いうには、

「わたくしの夢は当たりました」と。

公がいうには、

「どんな夢だ」と。

お答えしていうには、

「夢にかまどを見ましたが、これはわが君にお会いする前兆でした」と。

すると、公が怒っていうには、

「わしは聞いておる。主君にお会いする者は、夢に太陽を見ると。わたしに会う前兆として、夢にかまどを見たとはどういうことだ」と。

そこで、こびとがお答えしていうには、

「そもそも、太陽は天下をあまねく照らすもので、一つの物だけがその光に当たることはできません。君主は国中の人々をあまねく照らされるお方で、一人の人だけが君主の光を抱くことはできません。したがって、主君にお会いしようとする者は、夢に太陽を見るのです。

そもそも、かまどは一人がこれに当たれば、後ろの人は火を見るすべもありません。今もしかしたら、君主の光に一人で当たっている者がいるのではないでしょうか。それならば、わたくしが夢にかまどを見ましたのも、もっともなことではありませんか」と。

【注】

・霊公――春秋時代、衛の君主。
・弥子瑕――春秋時代、衛の霊公の嬖大夫(へいたいふ)。

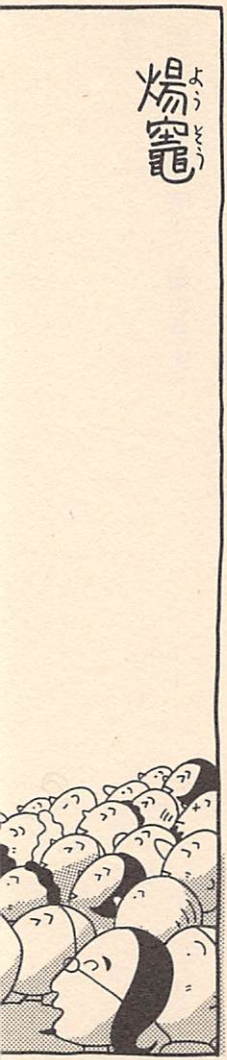
一

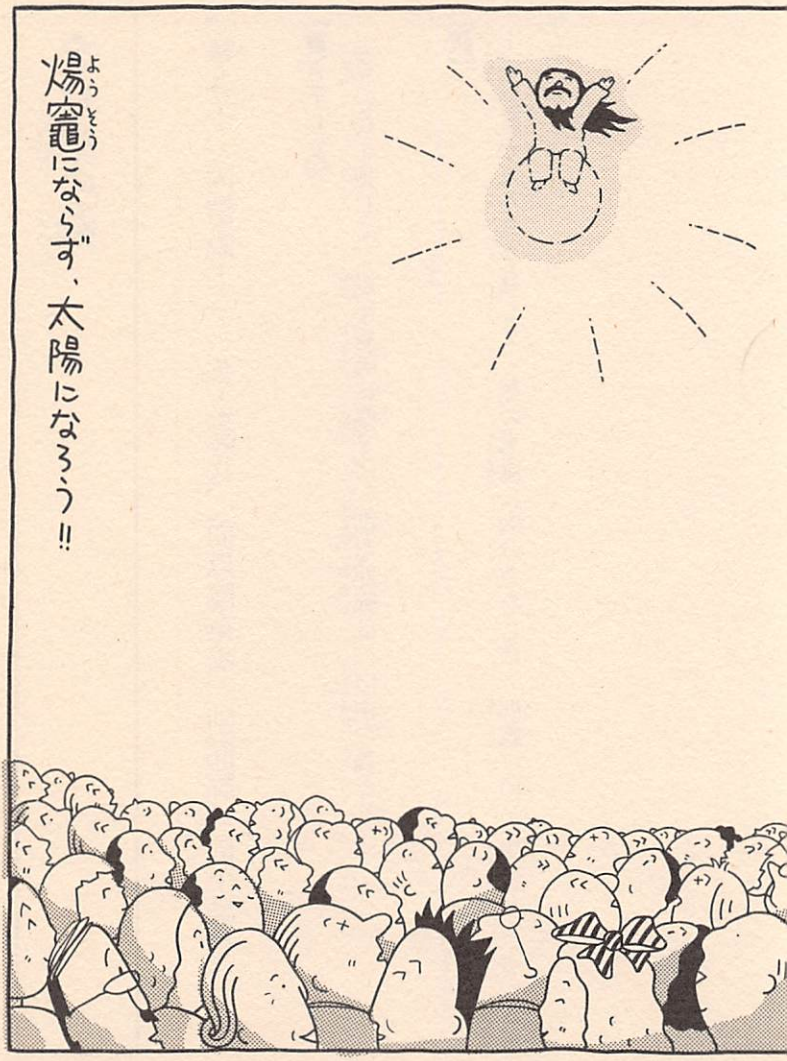
今日の故事成語は「煬竈」です。

「煬竈」とは、かまどの火のことを表わします。そして、徳のない君主の政体のことを表わす言葉です。つまり、かまどの火に一人があたれば、他の人はそのかまどの火にあたることはできないと。しかし、もし偉大な君主であるならば、太陽のようにその国全体を光に包むはずです。

ところで、「開元の治」をなした玄宗。彼は以前は太陽でしたが、後期になるとかまどの火になりました。これからもわかるとおり、心の働きによってすべての現象は動きます。そして、その心の働きの正しいコントロールをすることこそ、偉大なる聖者サキャ神賢の教えであり、またそれを実践し到達してこそ、わたしたちはすべての真実を知ることができるのです。

したがって、皆さんは煬竈にならず太陽になれるように、日々奮闘しましょう。




煬竈(ようそう)にならず、太陽になろう!!

❖口中の蝨

［韓非子、内儲説上］　弛上党兵、而以臨東陽、則邯鄲、口中蝨也。

【書き下し文】

上党の兵を弛して、以て東陽に臨まば、則ち邯鄲は、口中の蝨なり。

【訳】

上党に置かれた兵を移して、趙の東陽に向けたならば、邯鄲は口の中のしらみのようなものでしょう。

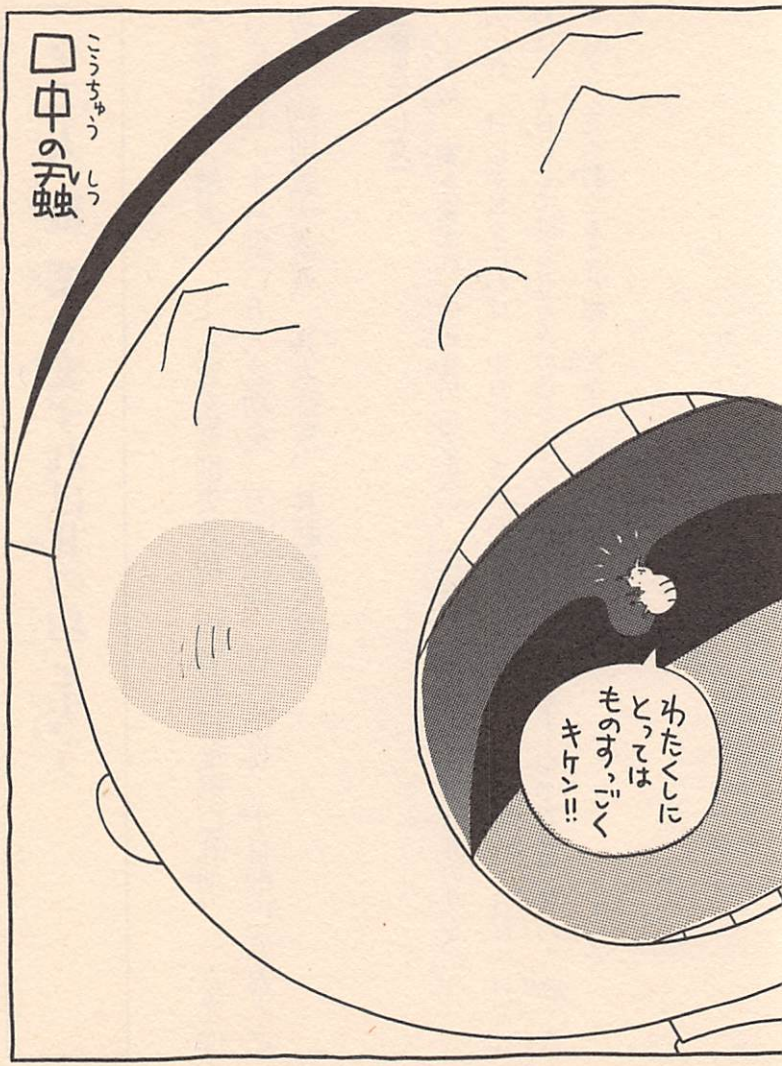
【注】

・上党――戦国時代の韓の地。今の山西省長治市。
・邯鄲――戦国時代の趙の都。今の河北省南部の都市。

今日の故事成語は「口中の蝨」です。

蝨とは、しらみのこと。つまり、口の中のしらみは簡単に噛みつぶすことができることから、大変簡単であることを表わし、また逆に、しらみのサイドから見ると、口の中にいるということは大変危険ですから、大変危険な状態を表わします。

ところで、このような一つのことわざが人間の側から、つまり口を有する側からと、それからしらみの側からの両方から検討され、両方の意味で使われるということは、韓非子もなかなか現象を見つめる力があったと思われます。


口中の蝨
こうちゅう
しつ
わたくしにとってはものすっごくキケン!!

❖工人数業を変ずれば其の功を失う

［韓非子、解老］　工人数変業則失其功、作者数揺徙則亡其功。一人之作、日亡半日、十日則亡五人之功矣。万人之作、日亡半日、十日則亡五万人之功矣。然則数変業者、其人弥衆、其虧弥大矣。

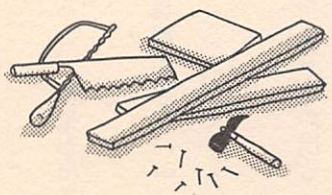
【書き下し文】

工人数〻業を変ずれば則ち其の功を失い、作者数〻揺徙すれば則ち其の功を亡う。一人の作、日に半日を亡わば、十日にして則ち五人の功を亡う。万人の作、日に半日を亡わば、十日にして則ち五万人の功を亡う。然らば則ち数〻業を変ずるは、其の人弥〻衆くして、其の虧くること弥〻大ならん。

【訳】

職人がしばしば仕事を変えていると、その結果が得られず、何か作るのにしばしば計画を変更していると、その結果が失われる。一人の仕事で一日につき半日分が失われるならば、十日では五人分の結果が失われるのである。一万人の仕事で一日につき半日分が失われるならば、十日では五万人分の結果が失われるのである。

したがって、しばしば仕事を変えていると、それに従事している人が多ければ多いほど、その損失もますます大きくなるのである。



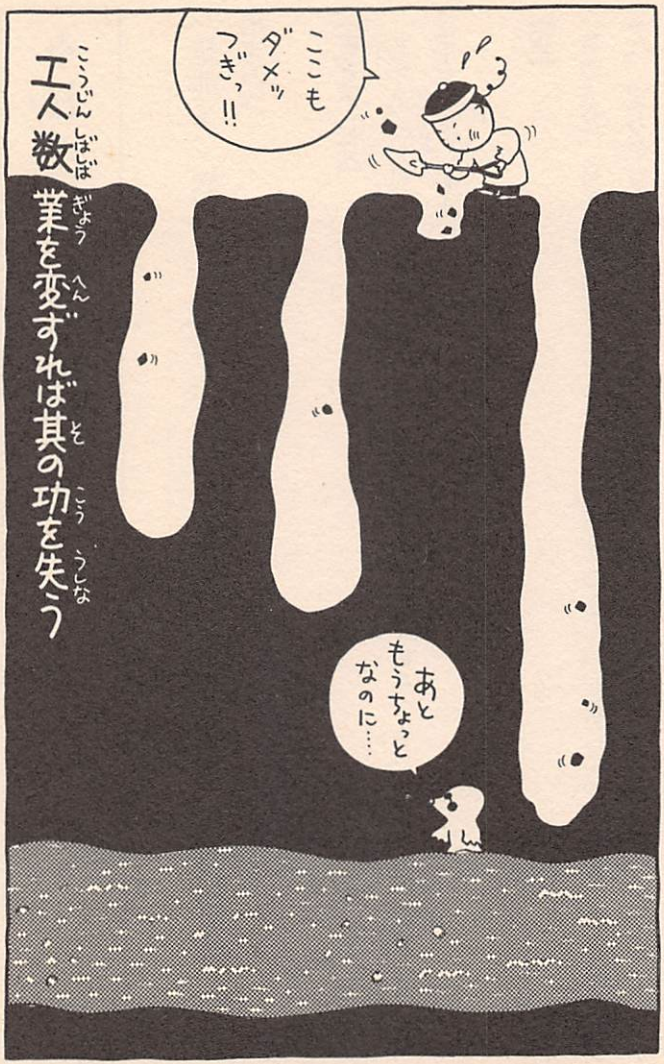
今日の故事成語は「工人数業を変ずれば其の功を失う」です。

これは、例えば大工などの職人が、その仕事をちょくちょく変えていると、結果が得られないという意味です。

わたしは、この手の故事成語が大変好きです。というのは、もともと真理の実践の中に奮闘努力の実践があります。これは一つのことをやり続ける修行ということができるでしょう。

一つの比喩をここで検討しましょう。例えば二百メーター下に水脈、つまり水の出る流れがあったとして、ある井戸掘りが一回目は百五十メーター、二回目は百メーター、三回目は百八十メーターと場所を変えながら掘ったとしましょう。この井戸掘りは決して水脈に当たることはありません。つまり、二百メーターに達して初めて水が出るのです。

これと同じように、一つの技芸に秀でるためには、長きの時間が必要なのです。したがって、皆さんも自分の人生の道をしっかりと定め、それに対してあきらめず全力で淡々と頑張りましょう。


ここも
ダメッ
つぎっ!!
あと
もうちょっと
なのに……
工人数
業を変ずれば其の功を失う

❖目は自ら見るに短なり

［韓非子、観行］　古之人、目短於自見。故以鏡観面。智短於自知。故以道正己。

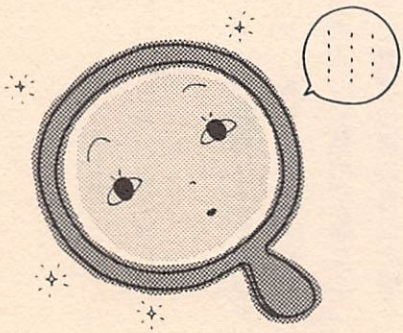
【書き下し文】

古の人、目は自ら見るに短なり。故に鏡を以て面を観る。智は自ら知るに短なり。故に道を以て己を正す。

【訳】

昔の人は、目が自分自身を見ることに欠点があるため、鏡によって自分の顔を眺めた。また、智力が自分自身を知ることに欠点があるため、道によって自分を正した。

目は自ら見るに短なり

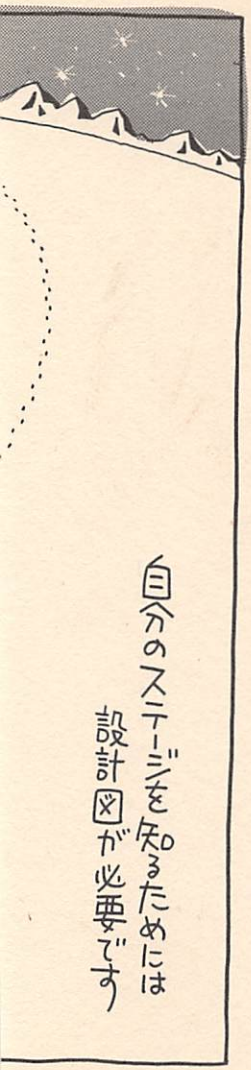


今日の故事成語は「目は自ら見るに短なり」です。

この「短なり」というのは欠点であるという意味にとらえることができます。つまり、自分自身の目で自分を見ることができない、これと同じように自分自身のことはわからないというのです。

ここで、経典主義の考え方と経典主義でない考え方が登場します。経典は道を表わす設計図のようなもの。そして、今自分自身がどの段階のステージにあり、これは過去の偉大な聖者方のどのレベルなのかを確定するためには当然経典の正しい翻訳が必要です。そして、それにのっとり自分を見つめること、これこそがまさに真理の鏡に自己を照らすということになるでしょう。

したがって、この今日の故事成語はわたしの戒めでもあり、そして皆さんがもしこの戒めを守るならば、皆さんの人生は大きく素晴らしい方向に変化するはずです。



目は自ら見るに短なり

❖冠帯の国

［韓非子、有度］　兵四布於天下、威行於冠帯之国。

【書き下し文】

兵は天下に四布し、威は冠帯の国に行わる。

【訳】

（魏の）兵は天下四方に広がり、その国威は衣冠束帯の国である中国に及んだ。

今日の故事成語は「冠帯の国」です。

「冠帯の国」とは、しっかりと冠をつけ、そして帯を巻くことから、礼儀正しい国のことを表わします。

わたしは、インド、スリランカ、あるいはヨーロッパ、アメリカと多くの国々を回りました。そして日本ほど、この「冠帯の国」、礼儀正しい国はないと思います。しかし、日本人に、そして日本に一つ欠けているもの、それは精神文化、つまり宗教だということができるでしょう。

もともと、わたしたちはこの人間の世界に生を受け、そして死にゆくわけですが、その生を受け、生きている間のことについては、日本はかなり優秀な国であるということができるでしょう。しかし、死についての防備が全くなされていません。

わたしたちが生を受け、この人間の世界に存在するのは本当に短いもの。そして、その生を大切にして死後にしっかりと準備をすることこそ、最も賢い生き方ではないでしょうか。

冠帯の国
過ぎ去ってみれば一生なんてあっという間だったナー
それっ
バッ
死後の準備をすることこそ最も賢い生き方です

❖小利を以て大罪を加えられず

【韓非子、六反】　今不知治者皆曰、「重刑傷民、軽刑可以止姦。何必於重哉。」此不察於治者也。夫以重止者、未必以軽止也。以軽止者、必以重止矣。是以上設重刑、而姦尽止。姦尽止、則此奚傷於民也。所謂重刑者、姦之所利者細、而上之所加焉者大也。民不以小利加大罪。故姦必止者也。

【書き下し文】

今、治を知らざる者皆曰く、「重刑は民を傷り、軽刑は以て姦を止むべし。何ぞ必ずしも重きに於てせんや」と。此れ治を察せざる者なり。夫れ重きを以て止む者は、未だ必ずしも軽きを以て止まざるなり。軽きを以て止む者は、必ず重きを以て止む。是を以て上、重刑を設けて、姦尽く止む。姦尽く止まば、則ち此れ奚ぞ民を傷らんや。所謂重刑

は、姦の利する所の者は細にして、上の加うる所の者は大なり。民、小利を以て大罪を加えられず。故に姦必ず止む者なり。

【訳】

今、政治を知らない者が皆いうには、

「重刑は人民を損なうもので、軽刑こそ悪事を防ぎ止めることができる。どうして重くする必要があろうか」と。

これは政治を理解していない者なのである。

そもそも、重刑ならば悪事をやめようという者は、軽刑ではまだ必ずしもやめはしない。軽刑でもやめる者は、重刑ならば当然やめることになる。だから、上の者が重刑を設ければ、悪事はすっかりやむのである。悪事がすっかりやむとなれば、どうして人民が損なわれようか。

言ってみれば、重刑というものは、悪事を働く者の利益を少なくし、上より加えられる刑罰を大きくすることである。人民は小さな利益のために大きな刑罰を加えられたく

はないから、悪事は必ずやむのである。

＊

今日の故事成語は「小利を以て大罪を加えられず」です。

これは、小さな利益のために、もし重い刑罰を科すならば、それによってほとんどの国民が悪いことをしないというたとえです。

ところで『転輪獅子吼経』を見ますと、わたしたちの魂は、初めはいっさいの悪い行為をなしていなかったと説かれています。それが時代が過ぎるにしたがって、一つ一つ心の働きから悪業を生じさせ、そして、それに対応して重い刑罰がなされるようになったわけです。

では、もしわたしたちすべてが真理を実践し、そして心のけがれを浄化したらどのようになるでしょうか。これは当然刑罰そのものがいらない国になるはずです。そして、それこそが理想郷なのです。

皆さんは、罰を恐れて悪い行為をしない生き方を演じますか。それとも、心の浄化により、重い罪のない国を作ることが大切だと思われますか。

あっすごいものが落ちてる!!
だけど盗みは大罪だからナ…
びくびく
あっすごいものが落ちてる!!
落とした人はお困りでしょうねあなた落としませんでしたか?
小利を以て大罪を加えられず
心を浄化して刑罰がいらない国をつくれたら……

❖虎に翼

〔韓非子、難勢〕　夫勢者便治而利乱者也。故周書曰、「毋為虎傅翼、将飛入邑、択人而食之。」夫乗不肖人於勢、是為虎傅翼也。桀・紂為高台深池、以尽民力、為炮烙、以傷民性。桀・紂得成肆行者、南面之威為之翼也。使桀・紂為匹夫、未始行一、而身在刑戮矣。勢者養虎狼之心、而成暴乱之事者也。此天下之大患也。

【書き下し文】

夫れ勢は治に便にして乱に利ある者なり。故に周書に曰く、「虎の為に翼を傅くること毋かれ。将に飛びて邑に入り、人を択りて之を食わんとす」と。夫れ不肖の人を勢に乗するは、是れ虎の為に翼を傅くるなり。桀・紂高台深池を為りて、以て民力を尽くし、

炮烙を為りて、以て民性を傷う。桀・紂の肆行を成すを得たるは、南面の威之が翼と為ればなり。桀・紂をして匹夫たらしめば、未だ始めより一も行わずして、身は刑戮に在らん。勢は虎狼の心を養いて、暴乱の事を成す者なり。此れ天下の大患なり。

【訳】

そもそも、権勢は世を治めるにも便利であり、世を乱すにも役立つものである。したがって、『周書』にいうには、

「虎に翼をつけてはならない。飛んでいって町に入り、人を取って食おうとするからだ」と。

そもそも、不肖の人を権勢に乗せることは、虎に翼をつけることに等しい。桀と紂は、高殿や深い池を造っては人民の労力を搾り取り、火あぶりの刑を作っては人民の命を傷つけた。このように桀と紂が勝手気ままな振る舞いをなすことができたのは、天子の位という威力が翼となっているからである。もし桀と紂がただの男であったなら、もとから一つの悪行も成し遂げないうちに、その身はつかまって処刑されたこと

であろう。

すなわち、権勢は虎や狼のような心を養い、乱暴なことをするもととなる。これこそ天下にとって大きな災いなのである。

【注】

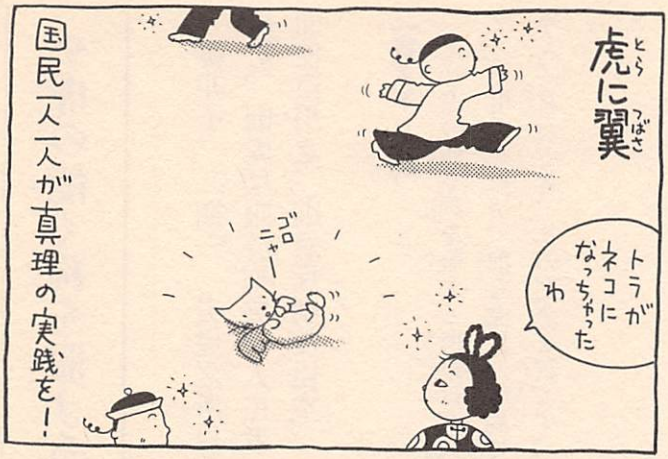
・桀――夏の最後の王。暴君の代表とされる。
・紂――殷の最後の王。暴君の代表とされる。

*

今日の故事成語は「虎に翼」です。

これは「鬼に金棒」と同じ意味合いで、もともと凶悪なものに対して、それ以上の力を加えるべきではないという教えです。

例えば、ある凶暴で残忍な人がいたとして、その人が政治的権力の座に就いたらどうなるでしょうか。それは、ちょうど虎が翼を生やしたようなもので、大変危険な状態を意味します。したがって、そのような状況に追い込まないように、わたしたちは日々政



治を監視すべきです。

ところで、わたしたちが政治を監視したとしても、このような現象は必ず起こります。なぜならば、わたしたちがもし為政者によって苦しめられなければならないというカルマを内在するならば、必ずそうなるからです。したがって、国民の一人一人が善行をなし、徳の修行をなし、法則の実践を行ない、寂静の実践を行なうならば、このような現象は決して起こりようはずはありません。それは、ちょうど熱い鉄板の上に水を垂らしたとしても、瞬時にその水が蒸発するのと同じなのです。

したがって、皆さん一人一人がしっかりと真理の実践を行ない、そして「虎に翼」の政治家が登場しないようにしようではありませんか。

❖虎の能く狗を服する所以は、爪牙なり

［韓非子、二柄］　夫虎之所以能服狗者、爪牙也。使虎釈其爪牙、而使狗用之、則虎反服於狗矣。人主者、以刑徳制臣者也。今君人者、釈其刑徳、而使臣用之、則君反制於臣矣。

【書き下し文】

夫れ虎の能く狗を服する所以は、爪牙なり。虎をして其の爪牙を釈てしめて、狗をして之を用いしめば、則ち虎反って狗に服せらる。人主は、刑徳を以て臣を制する者なり。今人に君たる者、其の刑徳を釈てて、臣をして之を用いしめば、則ち君反って臣に制せらる。

【訳】

そもそも、虎が犬を服従させることができるわけは、虎に爪と牙があるからである。もし虎がその爪と牙を捨てて、犬がそれを用いるならば、反対に虎は犬に服従することになるのだ。

主君は刑罰と徳によって臣下を制御するものである。今、人に君たる者がその刑罰と徳を捨てて、臣下がそれを用いるならば、反対に君主は臣下に制御されることになるのだ。

今日の故事成語は、「虎の能く狗を服する所以は、爪牙なり」です。つまり、君主が国民を統治する場合、爪と牙という、つまり飴と鞭を使い分けて、初めて権勢が成り立つんだということを説いた韓非子の教えです。

ところで、この中国はクル州に属します。クル州とは、もともと寿命が長く、そして、そこでの真理は大変低い次元のものです。したがって、人々も最終的な真理に目覚めることができず、このような成語が成立したのだと思われます。実際、もし転輪聖王のように偉大な聖王が現われるならば、その臣下も当然聖者でなければならず、したがって、このように牙や爪を使わなくとも、一人一人の自覚により素晴らしい国体が成立するはずです。

皆さんは、これからの新しい世紀にかけて、一人一人自覚するように努力しましょう。そして、皆さんが真理に完達するならば、そのときには素晴らしい世界、素晴らしい地球ができあがっているはずです。

虎の能く狗を服する所以は、爪牙なり
皆さんが
真理に完達するならば
すばらしい世界が！

❖好みを去り悪みを去れば、群臣素を見わす

［韓非子、二柄］　人臣之情、非必能愛其君也、為重利之故也。今人主不掩其情、不匿其端、而使人臣有縁以侵其主、則羣臣為子之・田常不難矣。故曰、「去好去悪、羣臣見素。」羣臣見素、則人君不蔽矣。

【書き下し文】

人臣の情、必ずしも能く其の君を愛するに非ざるなり、利を重んずるが為の故なり。今人主其の情を掩わず、其の端を匿さずして、人臣をして縁りて以て其の主を侵すこと有らしめば、則ち羣臣の子之・田常たること難からず。故に曰く、「好みを去り悪みを去れば、羣臣素を見わす」と。羣臣素を見わせば、則ち人君蔽われざるなり。

【訳】

臣下の本心は、必ずしもその君主を愛するから仕えるのではなく、君主から受ける利益を重んずるがために仕えているのである。つまり、今もし主君がその本心を覆い尽くすことなく、心のちょっとした動きを隠すことなく、臣下にその主君を侵すよりどころを与えるならば、大勢の臣下が子之や田常のようになるのも難しくはないのである。

したがって、「君主が好むことを示さず、嫌うことを示さなかったならば、大勢の臣下はその真情を明らかにする」という。大勢の臣下がその真情を明らかにしたならば、君主がだまされることはないのである。

【注】

・子之――戦国時代、燕の人。燕王噲を陥れて国君となったが、国は混乱する。斉の閔王に攻められて殺される。

・田常――春秋時代、斉の大夫。陳恆のこと。諡は成子。主君である斉の簡公を殺した。

今日の故事成語は、「好みを去り悪みを去れば、群臣素を見わす」です。

これは、大乗仏教の理論とも大変関係の深い教えであるということができます。もともと大乗の教えとは、素晴らしい世界を形成するための仏教的理論を背景とした教えであるということができます。

では、どこが似ているのでしょうか。つまり、大乗の成就をする場合、第一条件に来るのは平等心です。この平等心とは、すべての衆生に対して、好み、あるいは憎む――つまり嫌う、これをいっさい取り払い、そして淡々と現象を見つめる。そして、もう一歩進んで、すべての魂に慈愛を持つ、これが大乗の原則的・基本的なスタイルです。

そして、このような状態で君主が現われると、その群臣は、つまり多くの臣下は本質を現わすというのが韓非子の教えです。そして、もちろん本質を現わした方がわかりやすく、そして、それによって素晴らしい国家ができることはいうまでもありません。

したがって、皆さんも今日から平等心の実践をしようではありませんか。

好みを去り
悪みを去れば、
群臣素を見わす
みんな
本質を
現わして
きたなぁ…
よしよし

❖姦を知るも亦た大羅有り

「韓非子、難三」　且夫物衆而智寡、寡不勝衆、智不足以徧知物。故因物以治物。下衆而上寡、寡不勝衆、君不足以徧知臣也。故因人以知人。是以形体不労而事治、智慮不用而姦得。故宋人語曰、「一雀過、羿必得之、則羿誣矣。以天下為之羅、則雀不失矣。」夫知姦亦有大羅。不失其一而已矣。

【書き下し文】

且つ夫れ物は衆くして智は寡く、寡は衆に勝たず、智は以て徧く物を知るに足らず。故に物に因りて以て物を治む。下は衆くして上は寡く、寡は衆に勝たず、君は以て徧く臣を知るに足らざるなり。故に人に因りて以て人を知る。是を以て形体労せずして事治まり、智慮用いずして姦得らる。故に宋人の語に曰く、「一雀過ぎ、羿必ず之を得んとす

れば、則ち羿誣うるなり。天下を以て之が羅と為さば、則ち雀は失われず」と。夫れ姦を知るも亦大羅有り。其の一をも失わざるのみ。

【訳】

そもそもいったい、物は多くて智力は少ない。少ないものは多いものに勝てないのだから、智力では広く物事を知ることはできない。したがって、物によって物を治めるのである。

同様に、下々の者は多くて上の者は少ない。少ない者は多い者に勝てないのだから、君主は広く臣下人民を知ることはできない。したがって、人によって人を知るのである。こうすれば、身体を労することなく事は治まり、智力と思慮を用いることなく悪事を知り得るのである。

だから、宋の人の言葉にいうには、

「一羽の雀が飛び去るごとに、羿が必ずこれを射止めようとすれば、羿が名人だということも嘘になる。天下全体を網にすれば、一羽の雀も逃すまい」と。

そもそも、悪事を見つけるのにも、（天下という）大きな網があるなら、その一つも逃すことはないのである。

【注】

・羿――伝説上の弓の名人。堯の世に太陽が十個出て人民が苦しんだとき、その中の九個を射落としたという。

＊

今日の故事成語は、「姦を知るも亦た大羅有り」です。

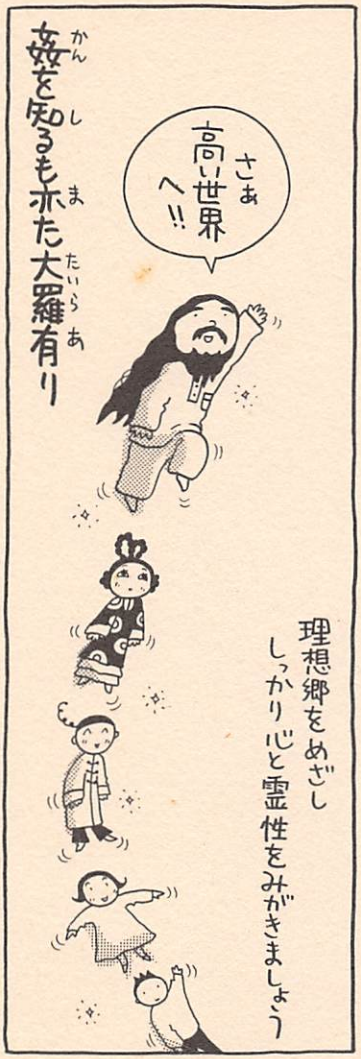
これは、この世の罪を一人で知ることはできない。しかし、万民の助けがあれば知ることができる。それと同じように、政というものは、一人で行なうことはできない。万民の助けがあってこそ、それがなすことができるんだという韓非子の考え方です。

これは、まさに大乗仏教的考え方と一致しています。では、どこが大乗仏教的考え方と一致しているのでしょうか。それは、個々の要素の集積こそが国家であり、そして個々の要素を高い世界へ引っ張り上げてこそ高い国家をつくれるというのが、大乗の理論の

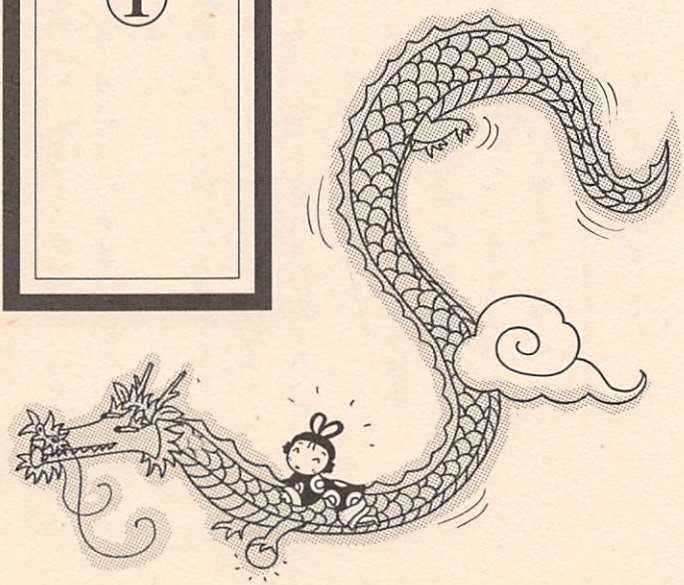
中に存在しているからです。

したがって、二〇〇〇年を過ぎて登場するかもしれない理想郷は、その前に個々の霊的な質、あるいは心の成熟といったようなものが高く引き上げられない限り、決して存在しないということになるでしょう。

そのためには、個々が自覚をし、修行するしかありません。しっかり理想郷を目指し頑張りましょう。



荀子編 ①



これからしばらくの間、荀子を検討してみたいと思います。

荀子は、紀元前三世紀ごろの人で、『荀子』二〇巻三二編を著わしました。彼は、孔子、孟子の系統、つまり儒家に属し、そして有名な性悪説を展開しました。

ところで、この荀子の性悪説とは、「人間は本来悪である。だからどうしようもないんだ」ではなく、「人間は悪の傾向を生まれながらにして有している。そして、それは努力することによって克服できるんだ」という考え方です。

これは仏教的な考え方と一致しています。わたしたちは生まれながらにして煩悩を持っている。その煩悩を止滅することによって、わたしたちは聖人になれ、本当に豊かな心、豊かな魂を形成することができるんだという考え方です。

しかし、彼は最終の解脱に到達していたわけではありませんから、当然彼の学問の幅において、正しい部分と正しくな

い部分があることは、ここでお断わりしておかなければなりません。

❖口耳四寸

［荀子、勧学］　君子之学也、入乎耳、箸乎心、布乎四体、形乎動静。端而言、蝡而動、一可以為法則。小人之学也、入乎耳、出乎口。口耳之間、則四寸耳。曷足以美七尺之軀哉。

【書き下し文】

君子の学は、耳より入りて、心に箸き、四体に布きて、動静に形わる。端にして言い、蝡にして動くも、一に以て法則と為すべし。小人の学は、耳より入りて、口より出づ。口耳の間は、則ち四寸のみ。曷ぞ以て七尺の軀を美とするに足らんや。

【訳】

君子の学は、耳から入ったものが心に密着し、体全体に行き渡って立居振舞いに現われる。したがって、わずかな言葉でも、ちょっとした行動でも、すべて法則規範とすることができる。

小人の学は、耳から入ったものがすぐに口から出てしまう。口と耳の間は、たったの四寸にすぎない。これでは、どうして七尺の体を立派にすることができようか。

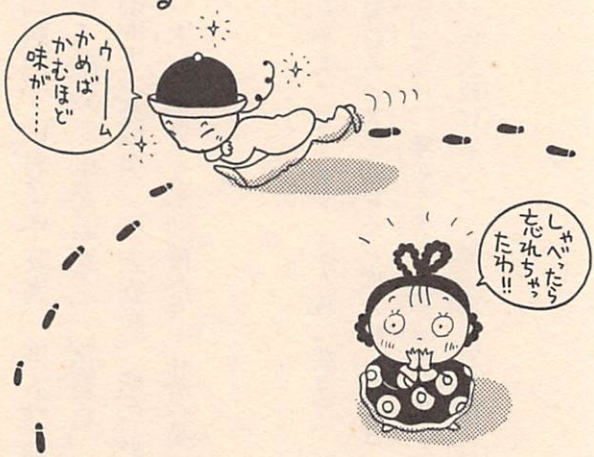
わたしがこの荀子の故事成語の中でも最も好きな言葉で、「口耳四寸」というのがあります。

これは、耳で聞いたことを即口に出す。つまり、薄っぺらな学問のことを表わします。ところで、果たして目で見たもの、あるいは耳で聞いたものを、そのまま表わしたとして、それは自分自身の身につくのでしょうか。例えば仏教においても、学んだことを自己の心の内側にとどめ、つまり記憶し、それを何度も何度も繰り返し記憶し、そしてその後にその記憶した教えをもとに人生を見つめ、思索するという考え方があります。

つまり、そのような考え方に立って実践してこそ、初めて自分の身につくわけです。したがって、皆さんも「口耳四寸」にならないように今日から努力しましょう。

何度も
何度も

繰り返し
記憶し
それに
もとづいて
人生を
見つめ
思索する



口耳四寸（こうじしすん）

❖君なる者は舟なり、庶人なる者は水なり

［荀子、王制］　馬駭輿、則君子不安輿、庶人駭政、則君子不安位。馬駭輿、則莫若静之、庶人駭政、則莫若恵之。選賢良、挙篤敬、興孝弟、収孤寡、補貧窮。如是則庶人安政矣。庶人安政、然后君子安位。伝曰、「君者舟也、庶人者水也。水則載舟、水則覆舟。」此之謂也。

【書き下し文】

馬輿に駭けば、則ち君子輿に安んぜず、庶人政に駭けば、則ち君子位に安んぜず。馬輿に駭けば、則ち之を静むるに若くは莫く、庶人政に駭けば、則ち之を恵するに若くは莫し。賢良を選び、篤敬を挙げ、孝弟を興し、孤寡を収め、貧窮を補く。是の如くなれば則ち庶人政に安んず。庶人政に安んじ、然る后に君子位に安んず。伝に曰く、「君なる

者は舟なり、庶人なる者は水なり。水は則ち舟を載せ、水は則ち舟を覆す」と。此を之れ謂うなり。

【訳】

馬車につないだ馬が驚けば、君子は車中で落ち着いていられず、政治について庶民が騒げば、君子はその地位に落ち着いていられない。馬車につないだ馬が驚いたときは、馬を静めるのに勝るものはなく、政治について庶民が騒いだときは、庶民に恵み施すのに勝るものはない。

すなわち、賢明で善良な者を選任し、篤実で敬虔な者を挙用し、孝行で従順な者を引き立て、孤児や寡婦を救い、貧困な者を助ける。このようにすれば、庶民は政治に安心する。庶民が政治に安心して初めて、君子はその地位に落ち着いていられるのである。

古伝にいうには、

「君主は舟であり、庶民は水である。水は舟を浮かべるが、また舟を転覆させる」と。

これはこのことを言ったのである。

今日の故事成語は「君なる者は舟なり、庶人なる者は水なり」です。これは庶人、つまり多くの民衆によって君主は支えられるんだという荀子の考え方を表わしています。もちろん、例えば現代史を見ても、国民が王に対して反乱を起こし、そして転覆させられた国家がたくさんあることはいうまでもありません。

したがって、君主がしっかりと一般の人たちの平和な生活を維持しようと努力するならば、このようなことは決して起きようはずがありません。

しかし、今はもう一つ別の要素が加わっているようにわたしは思われます。それは風です。風とは何かというと、これはマスコミを表わします。マスコミは一つの意思を持ち、それによって君主、つまり国家を転覆させること、これを自由に行なえる存在になりつつあるように思われます。

したがって、もし風が吹けども、水が波立たないような国民一人一人の智慧が向上するならば、そのときこそ、本当の意味での君主と、そして国民との関係が成立するのではないでしょうか。

少なくとも、わたしはマスコミの風によってなびかないように考えている一人である

ことはいうまでもありません。

❖伯牙琴を鼓して、六馬仰いで秣う

［荀子、勧学］　昔者、瓠巴鼓瑟、而流魚出聴、伯牙鼓琴、六馬仰秣。故声無小而不聞、行無隠而不形。

【書き下し文】

昔者、瓠巴瑟を鼓して、流魚出でて聴き、伯牙琴を鼓して、六馬仰いで秣う。故に声は小として聞こえざるは無く、行いは隠として形われざるは無し。

【訳】

昔、瓠巴が瑟を弾くと、水中を泳ぐ魚も水面に出てきて聴きほれ、伯牙が琴を弾くと、天子の車をひく六頭の馬も首を伸ばしてまぐさを食ったという。つまり、音声はどんな

に小さくても聞こえないものはなく、行為はどんなに隠れていても現われないものはないのである。

【注】

・瓠巴――古代の楚の人。瑟の名手。

・伯牙――春秋時代、楚の人という。琴の名手。

今回の故事成語は、「伯牙琴を鼓して、六馬仰いで秣う」です。

これは、伯牙という琴の名手が琴を弾くと、馬ですらその音色に聴きほれ、そして飼い葉を食らうという意味です。ところで、この故事成語の本当の意味合いは、内側に実力が存在すれば、必ずその実力は表に現われ、そして大きな影響があるんだという意味です。

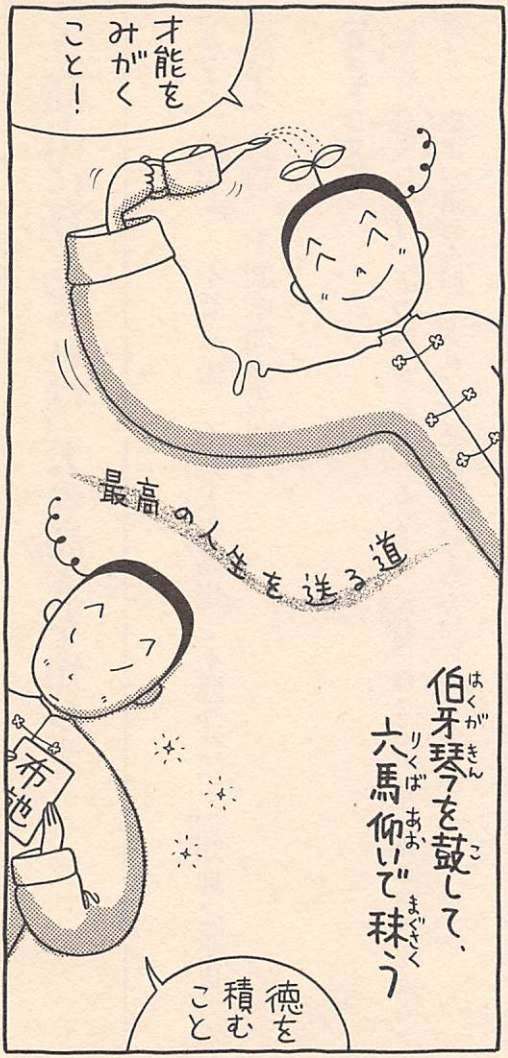
ところで、荀子の弟子である韓非子は、「猿を柙中に置けば豚と同じ」という、全く反対の故事成語を説いています。

しかし、わたしは荀子の考えていることに少し欠陥があり、韓非子の考えていることは具体性はあるが教えが貧弱であるという考え方を採っています。それはなぜかというと、もし本当に徳というものが存在するならば、内側に才能がある場合、その才能は世に発揮され得る。しかし、徳がなければ、その才能は世に発揮されないというのがわたしの見解です。そして、仏教理論における徳の理論もそれを示唆しています。

したがって、荀子のこの教えに徳の理論が加わり、それを現象的に見た場合、韓非子の故事成語になるんだと理解するならば、この二つの故事成語がよく理解できるはずで

す。

人間すべて、必ず何らかの才能を有しています。その才能に早く気づき、それを磨き上げ、そして、徳を積むことこそ最高の人生を送るただ一つの道ではないでしょうか。



❖高山に登らざれば、天の高きを知らず

［荀子、勧学］　不登高山、不知天之高也。不臨深谿、不知地之厚也。不聞先王之遺言、不知学問之大也。

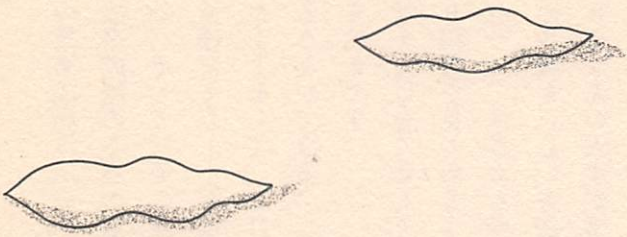
【書き下し文】

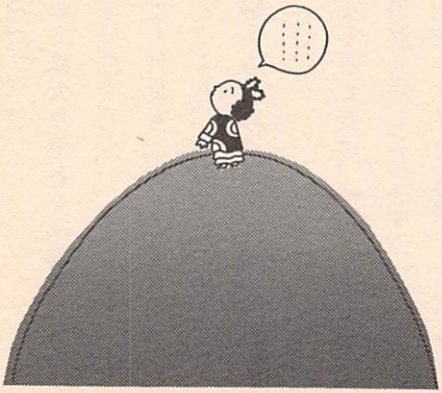
高山に登らざれば、天の高きを知らざるなり。深谿に臨まざれば、地の厚きを知らざるなり。先王の遺言を聞かざれば、学問の大なるを知らざるなり。

【訳】

高い山に登らなければ、天の高いことはわからないし、深い谷に行ってみなければ、地の厚いことはわからない。このように、昔の聖王の残した言葉を聞かなければ、学問

の偉大さもわからないのである。





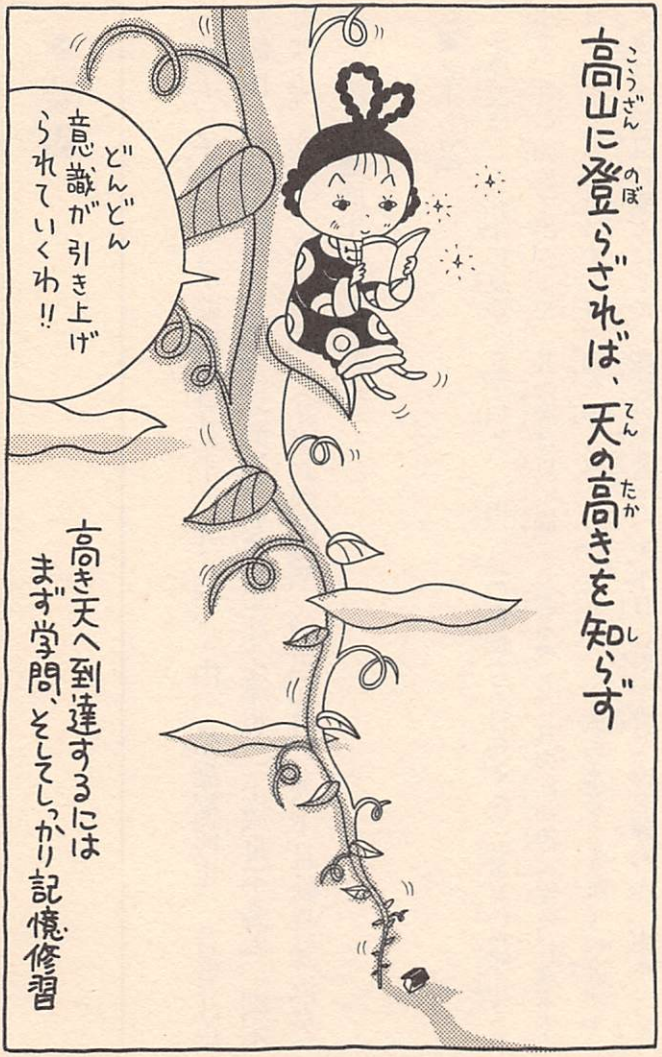
今日の故事成語は「高山に登らざれば、天の高きを知らず」です。

この故事成語の本当の意味合いは、教えを理解して初めて偉大な聖者を理解することができる。そして、その高き天に到達するためには、まず学問を行ない、そしてしっかりと記憶修習をし――記憶修習とは、記憶したことを何度も何度も記憶し直すという作業ですね――そして、それによって聖者の状態を見ることにより、その聖者の偉大さを理解することができる。つまり、人間が聖なるものを理解するためには学問が必要なんだという教えです。

この考え方は全く正しく、まず仏教においても土台となる考え方は、正しく学ぶ→それにより現象を見つめる→そして悟りへ到達するという道筋を示しています。

したがって、皆さんも今の現世の知識だけではなく、死後の世界の知識、あるいは高い世界の知識を正しい方法によって記憶し、その記憶を繰り返すようにしましょう。それにより皆さんの人生が素晴らしい方向に向かうことは間違いありません。

高山に登らざれば、天の高きを知らず



高き天へ到達するには
まず学問、そしてしっかり記憶修習

❖濫觴（らんしょう）

［荀子、子道］　子路盛服見孔子。孔子曰、「由、是裾裾何也。昔者江出於嶓山、其始出也、其源可以濫觴。及其至江之津也、不放舟不避風、則不可涉也。非唯下流水多邪。今汝衣服既盛、顔色充盈。天下且孰肯諫汝矣、由。」子路趨而出、改服而入。

【書き下し文】

子路盛服して孔子に見ゆ。孔子曰く、「由、是の裾裾たるは何ぞや。昔者江は嶓山より出で、其の始めて出づるや、其の源は以て觴より濫るべし。其の江の津に至るに及ぶや、舟に放らず風を避けずんば、則ち渉るべからざるなり。下流の水多きを唯てに非ずや。今汝は衣服既に盛んにして、顔色は充盈す。天下且に孰か肯て汝を諫めん、由や」と。

子路趨りて出で、服を改めて入る。

【訳】

子路が立派に着飾って、孔子にお会いした。孔子がいうには、

「由よ、このきらびやかな格好はどういうことだ。古来、揚子江は岷山から流れ出ているが、その初めて流れ出る源は、やっと杯にあふれるほどのものでしかない。しかし、それが揚子江の船着き場に至るころになると、舟によらず風を避けずには、到底渡ることはできない。これは下流の水が多いからではないか。

今、お前はそのように立派な衣服で装い、顔つきはいかめしい。天下の人で、だれが進んでお前を諫めようと思うだろうか、由よ」と。

そこで、子路は小走りに退出し、服を着替えて再び入ってきた。

【注】

・孔子――春秋時代、魯の人。儒家の祖。

・子路――春秋時代、魯の人。孔子の弟子。仲由（ちゅうゆう）の字（あざな）。
・嵫山――四川省と甘粛省の境にある高山。

＊

今日の故事成語は「濫觴（らんしょう）」です。

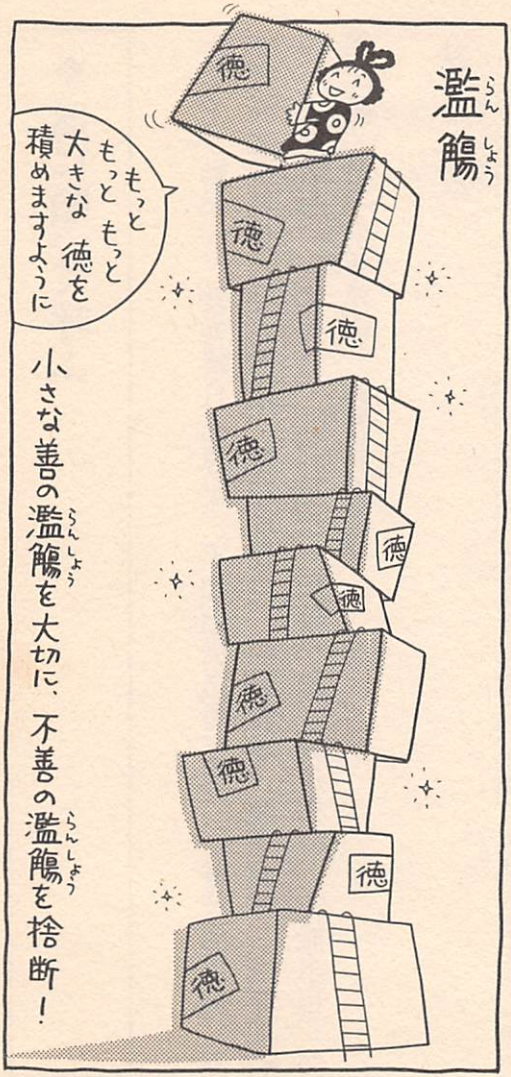
「濫觴」とは、杯（さかずき）にあふれた水という意味です。これは皆さんもご存じのとおり、大河が形成される場合、初めは小さな水たまり、それがあふれ、そして集合し、大河を形成します。その小さな水たまりの様子、あふれた様子を「濫觴」という言葉で表わし、物事の始まりを表わしているのです。

ところで、わたしたちが真理の実践を行なう場合、初めは小さな善や小さな徳から実践すべきなのです。そして、その小さな善や小さな徳が増大してくる段階で、より大きな善、より大きな徳が積めるようになります。これはまさに小さな水たまりが小さな川となり、大河となる流れと同じです。

逆に、わたしたちが堕落するときも同じで、小さな不善を肯定する心、あるいは曖昧にする心から、どんどん不善の心が増大し、そしてしまいには取り返しのつかないよう

な人生を展開します。

したがって、皆さんは小さな善の濫觴を大切にし、善を積み、そして不善の濫觴を捨断するように努力しましょう。



❖風に順いて呼ぶ

［荀子、勧学］　吾嘗終日而思矣、不如須臾之所学也。吾嘗跂而望矣、不如登高之博見也。登高而招、臂非加長也、而見者遠。順風而呼、声非加疾也、而聞者彰。假輿馬者、非利足也、而致千里。假舟楫者、非能水也、而絶江河。君子生非異也。善假於物也。

【書き下し文】

吾嘗て終日にして思うも、須臾の学ぶ所に如かざるなり。吾嘗て跂ちて望むも、高きに登るの博く見ゆるに如かざるなり。高きに登りて招けば、臂長きを加うるに非ざるなり、而るに見る者遠し。風に順いて呼べば、声疾きを加うるに非ざるなり、而るに聞く者彰かなり。輿馬を仮る者は、足を利するに非ざるなり、而るに千里を致す。舟楫を仮

る者は、水を能くするに非ざるなり、而るに江河を絶る。君子は生異なるに非ざるなり。善く物に仮ればなり。

【訳】

あるときわたしは一日中思案したが、少しの間学んだことには及ばなかった。あるときわたしはつま先立って遠くを望み見たが、高い所に登ったときの遠く広く見渡せることには及ばなかった。高い所に登って手招きすれば、腕が長さを増すわけではないが、遠くからでもよく見える。風向きに従って呼べば、声が速さを増すわけではないが、明瞭に聞こえる。車と馬を利用する者は、足が強いわけではないが、千里を行くことができる。舟と櫂を利用する者は、泳ぎがうまいわけではないが、大河を渡ることができる。君子も生まれつき普通の人と異なっていたわけではない。物を上手に利用したまでである。

今日の故事成語は「風に順いて呼ぶ」です。

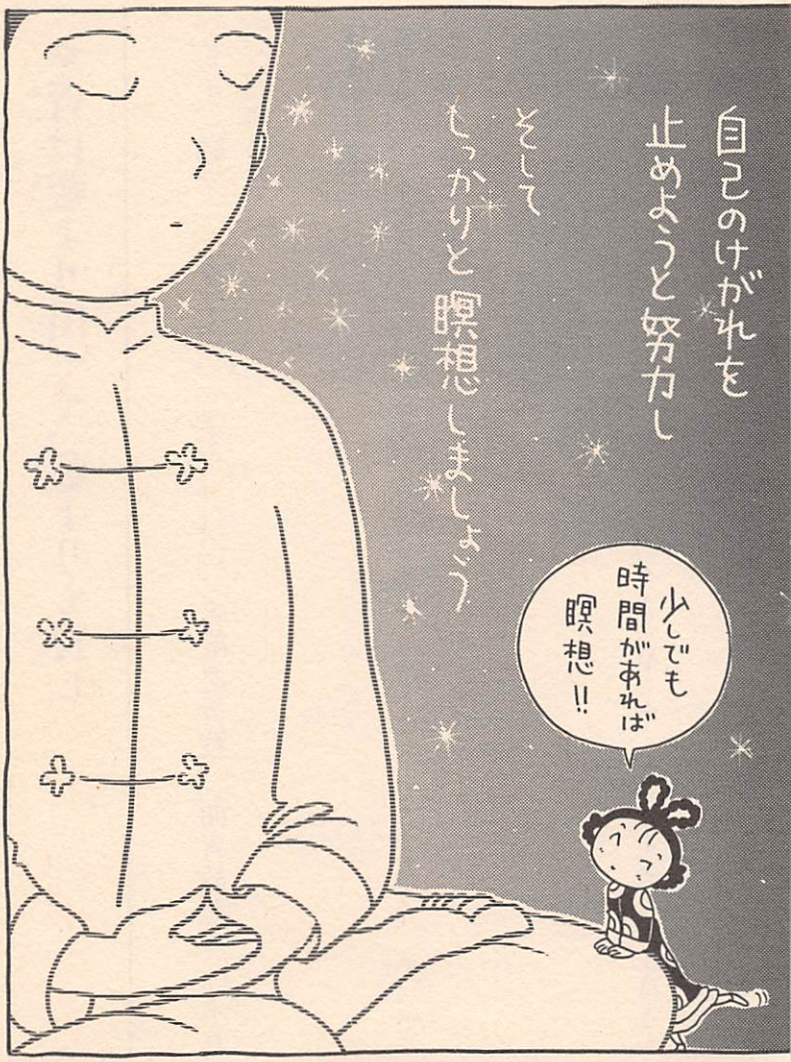
この考え方は、わたしたちの人生に大きな示唆を与えてくれます。例えば、風上から声を発した場合と風下から声を発した場合とでは、当然、風上から声を発した方が声の通りがいい。これと同じように、わたしたちがいろいろな道具を活用し、そして勉学に励み、自己のけがれを止めようと努力し続けるならば、それによって、わたしたちは大いなる利益を得ることができるという教えです。

ところで、もともと学問の発生は、瞑想できなくなった心の弱い者が町の近くで経典を編纂することから始まったと、『創世期経』では説かれています。そして、もしわたしたちが単なる学問ではなく、その教えをしっかりと瞑想することができるならば、この荀子の言う以上の効果を発揮することができるはずです。

したがって、皆さん、少しでも時間があれば瞑想しようではありませんか。

学問に励み

風に順いて呼ぶ


自己のけがれを
止めようと努力し
そして
しっかりと瞑想しましょう
少しでも
時間があれば
瞑想!!

❖青は藍より出でて、藍よりも青し

［荀子、勧学］　君子曰、「学不可以已。青取之於藍、而青於藍、冰水為之、而寒於水。」

【書き下し文】

君子曰く、「学は以て已むべからず。青は之を藍より取りて、藍よりも青く、冰は水之を為して、水よりも寒し」と。

【訳】

君子がいうには、

「学問は途中でやめてはならない。青色は藍の草から取るが、藍よりも青く、氷は水か

らできるが、水よりも冷たい」と。

今日の故事成語は、わたしの最も好きな故事成語の一つ「青は藍より出でて、藍よりも青し」です。

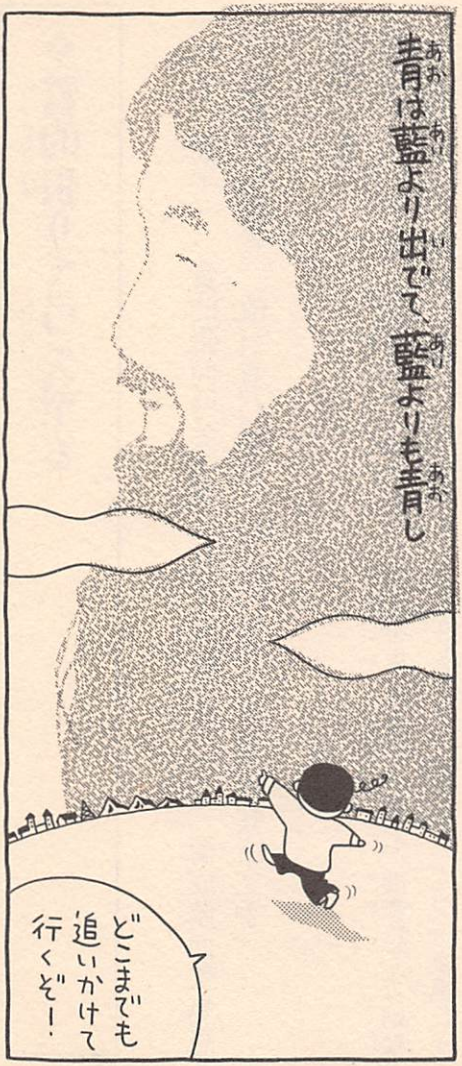
これには二通りの意味合いがあります。一つは、もともと人間の持っている先天的素質を努力することによって磨き上げる、そしてその先天的素質をそれ以上に増大させることができるという意味合いと、もう一つは、その努力によって先生を越えることができるという二つです。

しかし、この第二番目については疑問があります。なぜならば、本質的に深い学問の体系であったり、あるいはその思想体系や哲学体系が深ければ、決して弟子は師を超えることはできません。その典型的な例が、サキャ神賢の二大弟子といわれたサーリプッタやマハーモッガッラーナがサキャ神賢を越えられなかったことであり、これを見ても、歴然としていることでしょう。

特に絶対の真理の実践の場合、一生ではなく何カルパ、――つまり宇宙の創造・破壊を何回、何十回、何百回、何千回、何万回と経験し、その間にずっと真理の実践を続けていますから、これを超えることは至難の業です。しかし、師を目標とし、師と同じよ

うになろうとする心の働きは、もしそれがその人の向上心を高め、そして達成へと導くなら素晴らしい心の働きだと思います。

皆さんも「青は藍より出でて、藍よりも青し」、このことわざをしっかりと肝に銘じ、自分自身の持っている先天的な才能を増大させるように努めてください。



❖質的張りて弓矢至る

［荀子、勧学］　質的張而弓矢至焉、林木茂而斧斤至焉、樹成蔭而衆鳥息焉、醯酸而蚋聚焉。故言有召禍也、行有招辱也。君子慎其所立乎。

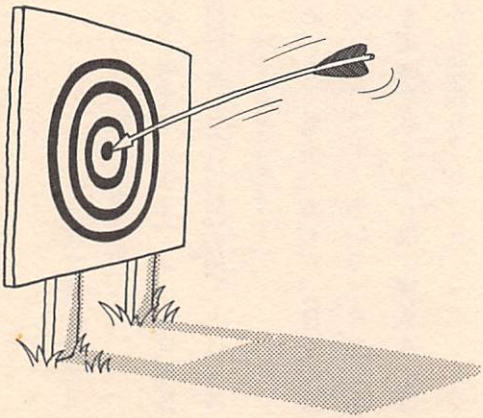
【書き下し文】

質的張りて弓矢至り、林木茂りて斧斤至り、樹蔭を成して衆鳥息い、醯酸にして蚋聚まる。故に言禍を召くこと有り、行辱しめを招くこと有り。君子其の立つ所を慎むかな。

【訳】

弓の的が張られると弓矢が飛んでくるし、林の木が茂ると斧やまさかりで切られるし、

樹木が木陰を作ると多くの鳥が憩うし、酢が酸っぱくなるとぶよが群がるのである。つまり、言葉によっては災いを招くことがあるし、行為によっては辱しめを受けることがある。君子は自分の立場に慎重にならなければならないのだなあ。

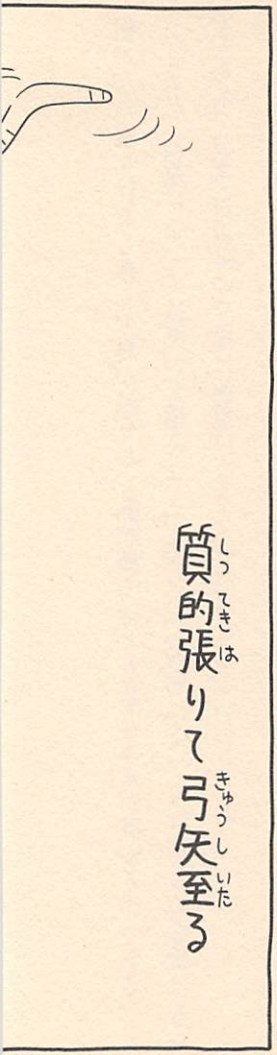


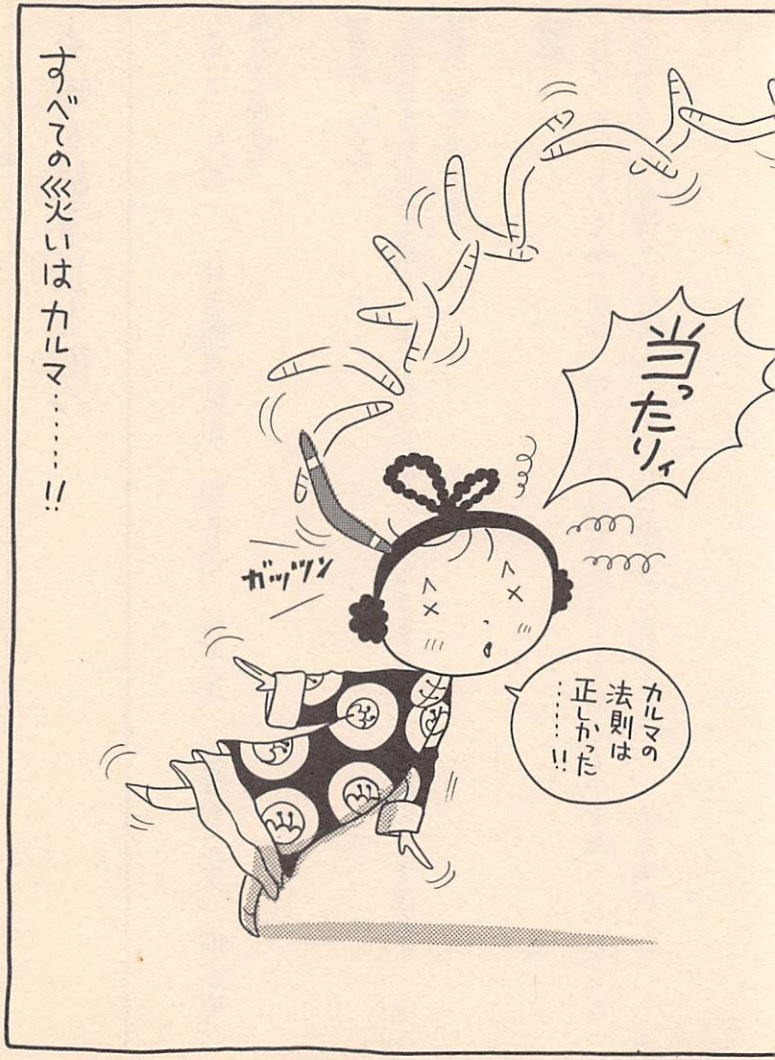
今日の故事成語は「質的張りて弓矢至る」です。

これは弓矢の的を張ると、そこに弓矢が飛んでくる、――つまりすべての災いはカルマであり、そしてその原因は自分の中にあるんだというカルマ自作の考え方です。

わたし自身、すべての現象は自己の心の現われであると考えています。オウム真理教には『五戒の詩』という歌があります。そこでは、「自己の苦しみは自己の因」とはっきりとうたっています。これは、まさに荀子の考え方と一致するところです。

したがって、未来において苦しみを生じさせないためにも、君主たるもの、日々の言葉・行動・心の働きに注意すべきであると荀子は説いているのです。そして、君主だけではなく、この本を読んでいらっしゃる皆さんがそれを実践なさるならば、皆さんには大変な幸福が待っていることは疑いありません。しっかり頑張りましょう。




すべての災いはカルマ……!!
当ったりィ
ガッツン
カルマの法則は正しかった……!!

❖短を続ぎ長を断つ

［荀子、礼論］　礼者断長続短、損有余、益不足、達愛敬之文、而滋成行義之美者也。

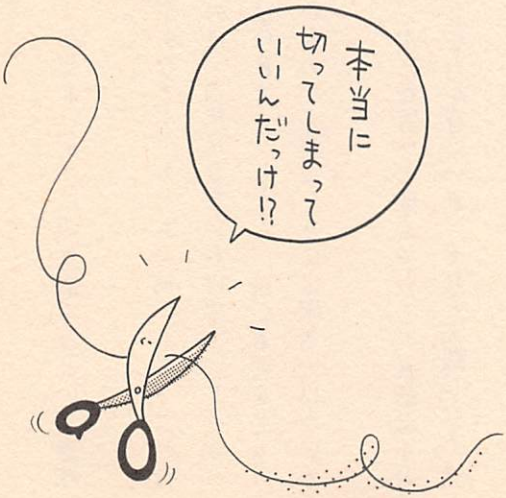
【書き下し文】

礼は長を断ち短を続ぎ、余り有るを損し、足らざるを益し、愛敬の文を達して、滋々行義の美を成す者なり。

【訳】

礼は、長いものを断ち切り、短いものを継ぎ足し、余りあるものを減らし、足りないものを増やし、愛情と畏敬の念に基づく装飾を成し遂げた上で、人道を実践していく美

しさをますます完成させるものである。



今日の故事成語は「短を続ぎ長を断つ」です。

これは、短いものを継ぎ足し、長いものをちょうどよいように切り捨てるという意味です。

しかし、わたしはこの故事成語について異論があります。もともと長いもの、これは当然必要だから長いわけです。そして、短いものは、当然足りないわけです。したがって、まず短いものを長くする、継ぎ足す、これはOKです。しかし、長いものをちょうどいいように切り捨ててしまった場合、もし長いものが必要なときには困るではないかという考え方があります。

したがって、短所は克服し、そして普通にし、次に長所へと変えていく。長所はそれ以上に増大させる。もしこれを行なうならば偉大な力が身につき、それを実践した人は、必ずや天才の域へと達するでしょう。

しかし、この短所を普通にし、長所にし、長所をよりいっそう増大させるためには、一日二十四時間では足りないかもしれませんね。

短を続ぎ長を断つ
天才になるぞ!!
えいっ
やっ
短所を克服、長所を増大

❖是是非非

［荀子、脩身］　是是非非、謂之智、非是是非、謂之愚。傷良曰讒、害良曰賊、是謂是非謂非曰直。

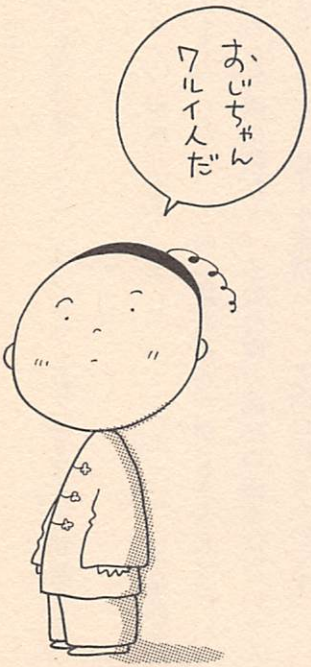
【書き下し文】

是を是とし非を非とする、之を智と謂い、是を非とし非を是とする、之を愚と謂う。良を傷くるを讒と曰い、良を害するを賊と曰い、是を是と謂い非を非と謂うを直と曰う。

【訳】

よいものをよいとし悪いものを悪いとする、これを智者といい、よいものを悪いとし悪いものをよいとする、これを愚者という。良い人をそしり傷つけるのを讒言といい、

良い人を害し損なうのを賊害といい、よいものをよいと言い悪いものを悪いと言うのを実直という。

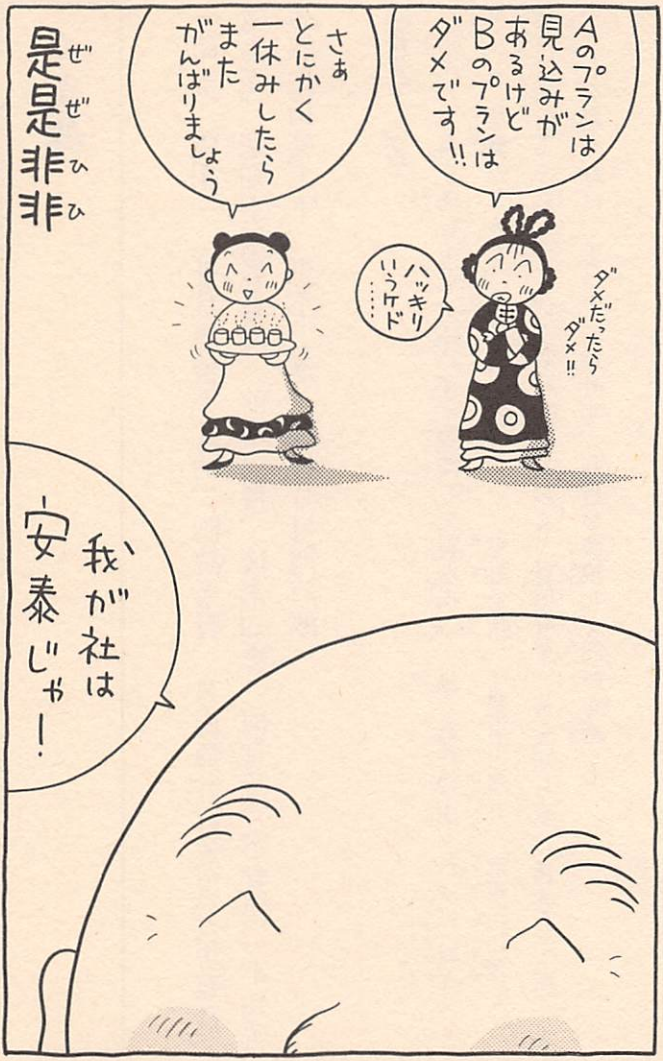


今日の故事成語は「是是非非（ぜぜひひ）」です。

これは、「よいものはよい、悪いものは悪い」と、はっきりと私心を交えず判断することを意味しています。

もともと、人間にはいろいろなタイプがあります。そして、このように「是是非非」を表現する人は、一般的に嫌われます。しかし、この「是是非非」ができる人はたいへん少なく、そしてこの人がいろいろな計画に絡むと、その計画の成功の確率はたいへん高くなり、つまりミスが少なくなり、そして必ずや素晴らしい方向に行くものです。

したがって、荀子（じゅんし）も、この「是は是、非は非」と言える人を智者として称賛しています。わたしもこのようなタイプが大好きです。しかし、逆に、このようなタイプだけだと殺伐とした雰囲気が醸し出されます。したがって、ソフトなタイプの人と「是は是、非は非」だというタイプの人がミックスされて、初めて順調な組織運営がなされるのではないでしょうか。


Aのプランは見込みがあるけどBのプランはダメです!!
ダメだったらダメ!!
ハッキリいうケド……
さぁとにかく一休みしたらまたがんばりましょう
是是非非
我が社は安泰じゃ!

❖覆轍（ふくてつ）

［荀子、成相］　世乱悪善不此治、隠諱疾賢、良由姦詐鮮無災。患難哉、阪為先。聖知不用愚者謀、前車已覆、後未知更。何覚時。不覚悟、不知苦、迷惑失指易上下、忠不上達、蒙揜耳目門戸塞。

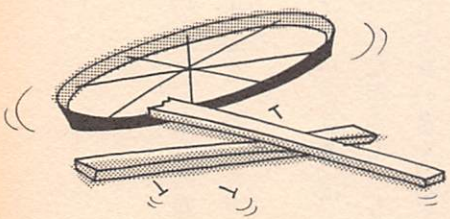
【書き下し文】

世乱れて善を悪むも此を治めず、隠諱して賢を疾み、良く姦詐に由うれば災無きこと鮮なし。患難なるかな、阪を先と為すこと。聖知を用いず愚者と謀り、前車已に覆りて、後未だ更むるを知らず。何ぞ覚むる時あらん。覚悟せず、苦を知らず、迷惑して指を失い上下を易うれば、忠は上に達せず、耳目を蒙揜して門戸を塞ぐ。

【訳】

世が乱れて善を嫌うようになってもこれを正そうとせず、隠し立てをして賢者を憎み、常にずる賢い人物を重用すれば、災いに遭わないことは珍しい。難儀なことだなあ、正常でない道を優先するとは。

聖人智者を用いず、愚者と事を謀り、前の車がすでにひっくり返っているのに、後の車はまだ改めることを知らない。いつ目覚めることであろうか。目覚め悟ることなく、困苦に気づかず、迷い惑って本筋を見失い、上下の別を乱せば、忠言は上に到達せず、耳目を覆い隠して、門戸をふさぐことになる。



今日の故事成語は「覆轍」です。

この「覆轍」というのは、ひっくり返った車の轍（わだち）という意味です。つまり、先人の過ちを見、そしてそれを反省することによって、後人、後から行く人が失敗をしないたとえです。

この考え方は、一部正しく一部正しくないということができるでしょう。なぜならば、先人の条件と後人の条件が同じであるか検討する必要があるからです。したがって、もし条件が同じであるならば、当然それは戒めとなりますし、条件が同じでないとするならば、それは条件を検討した上で、先人の失敗を参考にすればいいのではないでしょうか。

皆さんも、この「覆轍」の成語の意味合いをよくかみしめていただきたいものです。

覆轍
わたしも気をつけよう
あの人の場合は大で
わたしの場合はブタだけど……
スッテーン

❖蟬を耀かす

［荀子、致士］　夫耀蟬者、務在明其火、振其樹而已。火不明、雖振其樹無益也。今人主有能明其徳、則天下帰之、若蟬之帰明火也。

【書き下し文】

夫れ蟬を耀かす者は、務めは其の火を明かにして、其の樹を振うに在るのみ。火明かならざれば、其の樹を振うと雖も益無きなり。今人主能く其の徳を明かにするもの有らば、則ち天下之に帰すること、蟬の明火に帰するが若きなり。

【訳】

そもそも、蟬を取るために蟬を照らす者が精を出すのは、火を明るくして、樹を揺す

ることにあるのだ。火が明るくなければ、いくら樹を揺すっても利益はないのである。

今、主君にその徳を明らかにすることができる者がいれば、天下の人々はこれに帰服するが、それは蟬が明るい火に集まるようなものである。

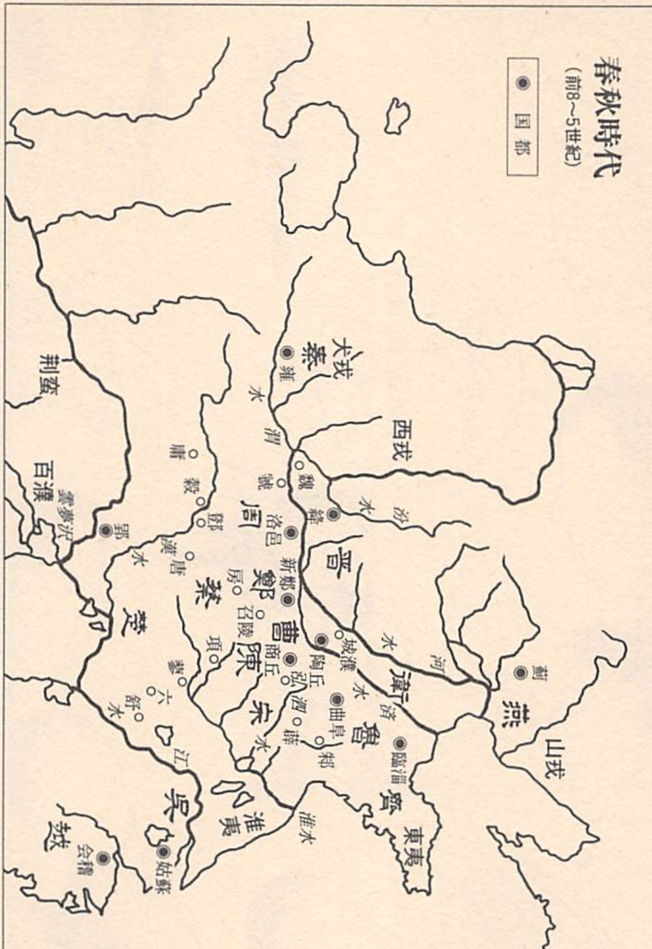
今日の故事成語は「蟬を耀かす」です。

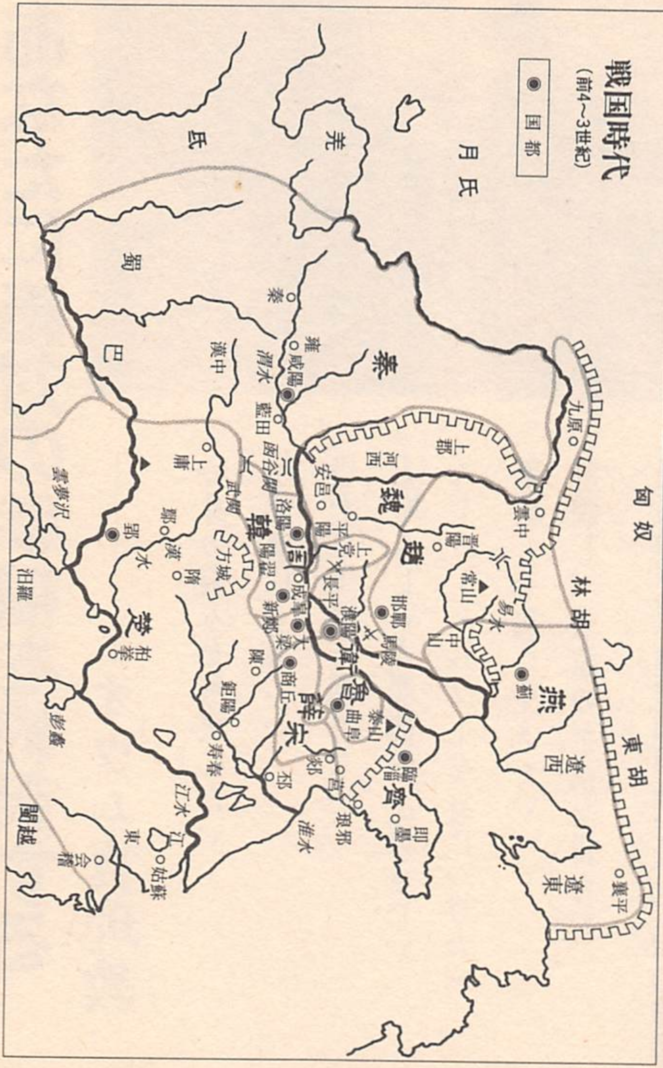
つまり、この成語は、明るい火に蟬が集まるように、もし偉大な徳を有する者がその徳を明らかにするならば、そこに人々は集まり、そして君主の目的は達成されるという意味です。

ところで、仏教でも「獅子吼」という言葉があります。これは、「自分自身は真理勝者である」、あるいは「覚者である」と堂々とすべての衆生の前で公言し、それによって多くの魂を引きつけ、そして救済するという意味があります。これもまさに、今日述べた「蟬を耀かす」と同じです。儒教においては、確かに謙虚さを重んじますが、このような故事成語があったということを聞いて、わたしも何となく安心しました。

さあ、皆さんは自分自身の才能や、あるいは徳を公にし、そして自分に合った生き方をしますか。それとも、謙虚という自己保全のために自分自身の生き方を消極的なものにするのですか。

蝉を耀かす
我こそは
真理勝者なり
さぁ！
救済だ!!


春秋時代
（前8～5世紀）
国都
犬戎
秦
雍
渭
水
西戎
魏
虢
汾
水
絳
晉
洛邑
周
新鄭
鄭
蔡
房
召陵
曹
陶丘
商丘
陳
弘
宋
帝丘
濮
衛
済
水
河
水
曲阜
魯
泗
薛
水
郯
臨淄
齊
薊
燕
山戎
東夷
淮夷
淮水
呉
姑蘇
越
会稽
江
舒
六
蓼
項
水
楚
郢
雲夢沢
百濮
漢
唐
鄧
穀
庸
荊蛮


戦国時代
(前4～3世紀)
◉ 国都
月氏
羌
氐
蜀
巴
秦
匈奴
林胡
東胡
燕
趙
魏
韓
周
斉
魯
宋
衛
楚
閩越
九原
雲中
上郡
河西
安邑
咸陽
雍
藍田
函谷関
洛陽
邯鄲
中山
常山
易水
薊
遼西
遼東
襄平
臨淄
即墨
琅邪
曲阜
泰山
大梁
新鄭
商丘
陳
寿春
淮水
郢
漢水
漢中
渭水
雲夢沢
江水
姑蘇
会稽
彭蠡
汨羅

あなたに絶対の幸福を約束する

――オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

3、テーラヴァーダ

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

もりもり
智慧のわく書 3
資料請求券

ズバリ！ 真理のメッセージ
リオン・テス・バシレイアス」

中波 720kHz　毎日23:00～ 1:00

短波 日本語放送　毎日22:00～23:00

11月1日～3月6日　7.310MHz

3月7日～5月　15.315MHz

英語放送（朝）毎日 5:30～ 6:00

（昼）毎日 1:30～ 2:00

※今週の聴きどころなどを毎日紹介。
便利なテレホンサービスもぜひご利用を。
TEL 03（5450）3624

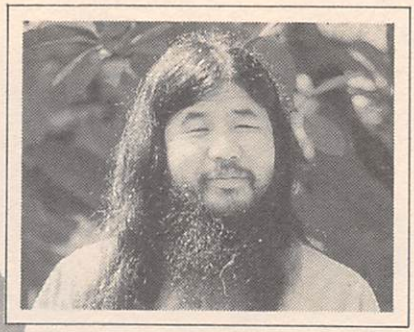
※タイアップマガジン

定期購読受付中！

「えんじょい・はぴねす」

※詳しいお問い合わせは、
「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」係まで。
TEL 03（5450）5586

モスクワからあなたに——
オウム真理教放送「エウアンゲ



尊師の声が あなたの耳を直撃！

麻原尊師が電波にのってあなたのもとへ。
宗教、音楽、科学、神秘……。
盛りだくさんの内容と、
次から次への新しい発見で
眠気も吹っ飛ぶこの時間！
さあ、あなたも今日から尊師を聴こう！

"オウム真理教ネット"

※ただ今、新入会員の方に素敵なプレゼント(えんじょいはぴねす最新号)をさしあげています。

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17

"オウム真理教ネット" 事務局 TEL 03-5450-3554

好評！ あなたとオウムをつなぐ
パソコン通信、

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

"オウム真理教ネット" のご紹介

TEL番号	03-5450-5580 (4回線) Tri-P利用可能(CXAUMNET)
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、 SYSOPあてメールにて申請

めんどうな手続きはいっさいありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

麻原彰晃の世界シリーズ

絶賛発売中!!

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？
その答えがこの本に集約されている。
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。

PART-1 幸福に至る四つの実践 定価2500円

PART-2 尊師、麻原彰晃が斬る！ 定価980円

PART-3 真実！六道輪廻 定価980円

PART-4 宗教にだまされるな！ 定価980円

PART-5 絶対の真理 定価980円

PART-6 願望成就の秘法 定価980円

PART-7 仏教真理・八正道 定価800円

PART-8 仏教真理 六波羅蜜 定価800円

PART-9 尊師、聖地インドを行く 定価750円

PART-10 仏教真理 五蘊無我 定価650円

PART-11 自己を超えて神となれ！ 定価820円

PART-12 仏教真理 十二縁起 定価620円

PART-13

これが尊師！

B6判　定価570円

雑誌・テレビ・ラジオにと、今大人気の麻原尊師。尊師の人気の秘密は何か？　雑誌社からの取材を中心に、様々な角度から尊師の魅力を探る。

PART-14

宗教の条件

B6判　定価570円

今、本物が明らかになる！　真の宗教の条件とは？　第三次宗教ブームと呼ばれる現在、様々な宗教の中から間違いなく本物を選び出すための条件を、あますところなく説き示す一冊。

PART-15

麻原彰晃　方便品

B6判　定価620円

最終解脱者、麻原彰晃尊師が、幸福になるための最速・最短の道をあなたに伝授する！　あなたを確実に幸福へと導く秘法が満載の、在家修行者座右の書。

PART-16

B6判　定価720円

難解な仏典の比喩・奥儀が現代的に説き明かされた！　釈迦牟尼の深遠な教えの真髄を、最終解脱者麻原尊師が巧みな方便でわかりやすく解説。読んで、考え、実践するための、本物のお経を公開！

PART-17

世界は尊師を待っている

B6判　定価1030円

転換期にあるロシアでの説法、大学での講演、インタビュー等を集めた第一部。テーラヴァーダ仏教のスリランカでの高僧との対談を集めた第二部。四十八ページカラーで尊師の幅広い活動を紹介。

最新刊

PART-18

THE説法 I

世紀末の危機を乗り越えるために

B6判　定価670円

「解脱が二十一世紀の日本を、そして世界を背負う！」――新しい時代の文明理念が今明らかに！　道なき現代社会に明確な指針を与える麻原尊師の説法集。

PART-19

THE説法 II

初公開！　タントラ・ヴァジラヤーナ最高の教え

B6判　定価570円

本来ならば直弟子にしか明かされない秘儀、タントラ・ヴァジラヤーナの高度な内容も惜しみなく公開。激動の時代において絶対不動の自己を確立させてくれる麻原尊師の説法の集大成。

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

● 全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

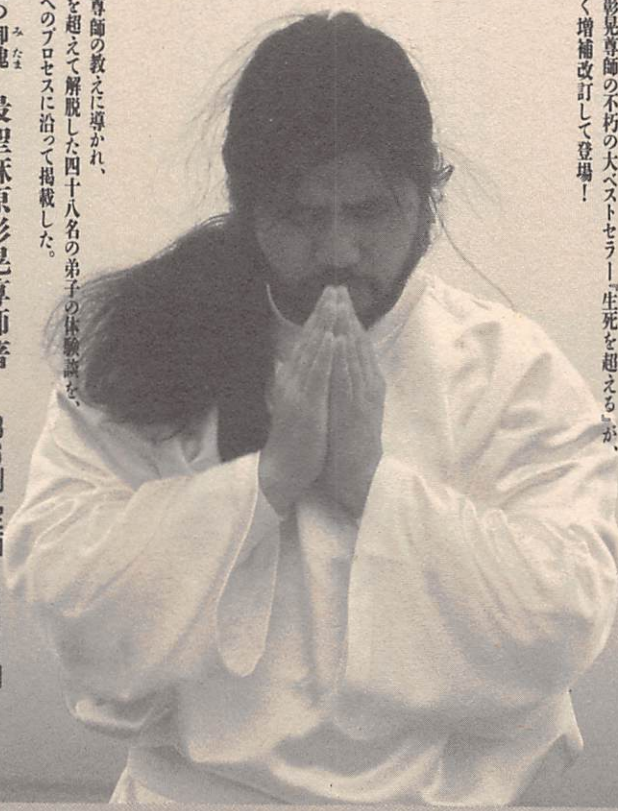
オウム出版　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL 03(3439)6043 振替 東京2-109325

あの名著がグレードアップ！

増補改訂版

生死を超える

麻原彰晃尊師の不朽の大ベストセラー『生死を超える』が、新しく増補改訂して登場！



麻原尊師の教えに導かれ、生死を超えて解脱した四十八名の弟子の体験談を、解脱へのプロセスに沿って掲載した。

真理の御魂（みたま） 最聖麻原彰晃尊師著

B6判 定価1800円

オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3479)6043 振替 東京2-109325

マハーヤーナ・スートラ

MAHAYANASUTRA

真理の御霊 最聖麻原彰晃尊師著

解脱——それは光を超えて

魂は彷徨する、自由を求めて。
魂は飛翔した、歓喜の世界へ!!

解脱それは、一言では表現することのできない深遠で、広大な世界。今まで、曖昧に定義されていた解脱の段階と状態について、この本はわかりやすく解き明かします。真理の最終地点を目指すあなたにとって、欠くことのできない宝書。

B6判296ページ(巻頭カラー8ページ) 定価3090円

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325

今明かされる
驚異の能力覚醒プログラム
これであなたも超人類！

オウム真理教東大生グループ著

能力覚醒の秘法を解く

「こんな成績で東大志望なの？」と
教師、友人から嘲笑された彼が
たった一年で現役合格を果たせたその秘密は？
自らの体験をもとにオウム真理教・東大生グループが
超古代からの叡智、原始仏教・ヨーガの秘儀を結集し、
「能力覚醒の秘法」に挑む！

新書判　680円　◇ご注文は書店にお願いいたします。
直接弊社にお申し込みの場合は、下記までご連絡ください。

オウム出版　〒154　東京都世田谷区世田谷2—8—17
☎　03（3439）6043／郵便振替　東京2—109325

ついに登場！
原始仏教の基本がわかる本

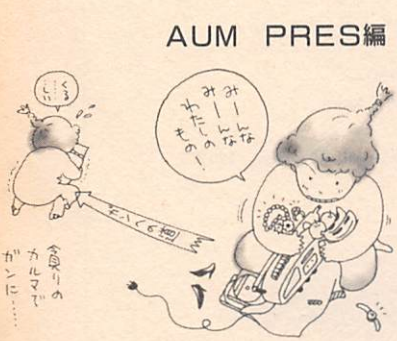
図解

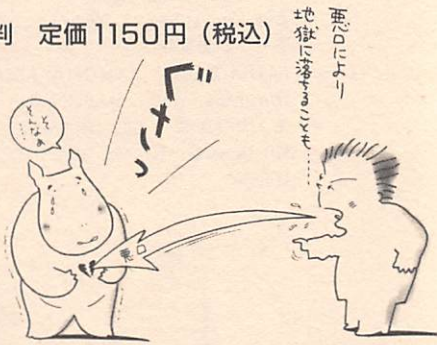
麻原尊師の真理入門セミナー

STEP TO 真理 Shinri

宇宙の法則編

AUM PRES編 A5判 定価1150円（税込）





宇宙の創造、カルマの法則、輪廻転生など、だれもが知りたかったちょっと不思議で神秘的な“真理の教え”をオウム真理教の麻原彰晃尊師がやさしくレクチャー。初心者でも理解できるようにイラスト・図表をふんだんに使って構成した、ファン待望のオウム真理教入門書——。

●全国の有名書店でお求めください　弊社に直接お申し込みの場合は下記まで　（定価には消費税が含まれています）

オウム出版　〒154　東京都世田谷区世田谷2−8−17　TEL　03（3439）6043　振替　東京2−109325

船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
那覇支部　098(869)7707
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
堺支部　0722(21)1843
〒590　大阪府堺市海山町4-168-9
高崎支部　0273(46)1573
〒370-12　群馬県高崎市倉賀野町 下稲荷前1081-5
福井支部　0776 (26) 6145
〒910　福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F
松本支部　0263(28)7429
〒399　長野県松本市芳川野溝527-3
深谷出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03(3476)5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3 プリメーラ道玄坂317号

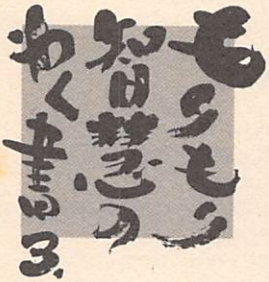
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.#2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hügel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany
スリランカ支部
(AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)
Horahena, Watte, Angulugaha, Galle, Sri Lanka
モスクワ支部　7-095-455-95-32
Kindergarten No.468, 32A Petrozavodskaya ul. Moscow, 125475
Russia

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『もりもり智慧のわく書』読者係」までお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版「『もりもり智慧のわく書』読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F



❖

1993年1月10日・初版発行

定　価――550円
著　者――真理の御魂(みたま) 最聖 麻原彰晃尊師
発行者――松本知子
　　石井久子
発　行――株式会社オウム
　　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
　　・TEL　03(3439)6043
　　振　替　東京2－109325
※乱丁・落丁はお取り替えいたします

©His Holiness the Master, Shoko Asahara　1993
ISBN4-87142-068-X　C7098　P550E

もっと知恵のわくまんが3

◉韓非子編③・荀子編①

ISBN4-87142-068-X C7098 P550E 定価550円(本体534円)